

今日も明日も

頭痛が痛い

川鶉鶏肋 春屋アロツ Fukapon

mnfikmyhk CREATURE MIXING

14

CONTENTS

| | | |
|-----------------------|---------------|-----------|
| コールド・パラダイス | 川鶺鷄肋 | 02 |
| 姫君は看病したい | 春屋アロツ | 54 |
| 猫と二人で | Fukapon | 59 |
| お薬はほどほどに | | 68 |

mnfikmyhk
CREATURE MIXING 14

ローゼン・パルマナス

川鷓鴣

物心ついた頃、世界は不思議と魔法に溢れていた。大輔にとっては、こちらの「落ち着いた」世界での居住歴の方がよほど短い。せいぜいが二年かそこらだ。

ここが如何に「落ち着いた」世界とはいっても、魔術や魔物といったややこしいな事物は隠蔽されているだけで厳然として存在して続けていたし、そして彼自身もまた魔物と対峙して人々を守る者達の一員であり続けてきた。

グリマエル世界の勇者ダイナスから斗流竜胆家の大輔となった後も、立場はそう変わる事は無かったと言えるが、だからといって精神への負荷が少なかったわけではない。

科学技術のレベルは産業革命前からの一足飛び。国の在り方も町の光景も、文化も習俗もまるで様変わりしてしまった。魔王の呪いでもって異世界に飛ばされたのだとばかり信じ込んでいたのも無理からぬ事だろう（ついでに言うなら、今現在に至ってもその可能性は否定できていない）。

最近になって学んだ学説によるならば、世界の歴史は横に向かつて断続的に流れるものだという。その横行ドリフト現象の概念を取り入れれば、あの時起こった出来事にも説明がつけられるかもしれない。

だが今となって思い返してみれば、かつて暮らしていた筈のあ

の世界、何もかもが不自然かつどうにも荒唐無稽であった。いかにも尤もらしい仮説を仕入れたからと言って、それで自分が体験してきた出来事に真実味が加わるというものでもない。

『尚書』憑きの大輔だけがアカシックレコードを基準としてドリフトを知覚できるなどと言われてはいるが、個々の出来事がドリフトであるか、あるいは勘違いや夢や妄想であるかの区別さえつかないのだから世話は無い。ついでに言うなら、ドリフトを科学的に計測する方法については、確立されていないどころか取っ掛かりさえも見つかっていない。つまり一次情報は大輔の主観的な脳内感覚としてしか存在しないわけで、そんな信頼性も再現性も怪しいデータなど解析の対象ともなり得ない。

そもそのドリフト説からして仮説なのだから、『尚書』説など仮説に仮説を重ねた砂上の楼閣だ。大輔が信頼を置く人々がそう信じて彼をそのように扱うからこそ、大輔自身も応えてそのように振る舞っているにすぎない。

それでも、より説得力のある説を求め、非才なりに推理を巡らせるぐらいは許されるだろう。自らの精神的安定のためにも。

これはあくまでも個人的な直感にすぎないが、大輔はドリフト現象そのもの存在には肯定的だ。ここ最近の経験からは、やはり実在すると考えた方が自然だろう。

しかし大輔がそうと意識しつつ経験してきたドリフト現象など、どれもこれもささやかなものに過ぎなかった。爆弾で更地になった町が元に戻ったり、数百人規模で生者と死者がすり替わったり、存在しなかった病気が出現したり、といった程度が精々だ。そして何より特筆すべきは、各々の変動の背景には常に「誰か」の「意

「思」や「祈り」といった類いの何かが関わっていたであろう事だ。少なくとも一部の変動に関しては、彼自身が提供した情報を基に「狙って」起こされたものだった。

そうした経緯と比べてみれば、二年前のあの断絶は大規模な割に意義に乏しすぎたと思えてならない。誰の望みに起因するのか、一体誰得かと問うてみても、それこそ大輔自身ぐらいいしか残らない。

現実の世界を受け入れるには繊細すぎた少年の奔放な妄想による脳内産物、と認めるのは当人的にはさすがに躊躇がある。いっそ邯鄲の枕とでも解釈した方がマシだ。大輔ごときが超大規模なドリフトを起こしたなどという珍説を引っ張ってくるより、夢オチの方がよっぽど説得力があるだろうし。

夢か。それも言い得て妙かもしれない。

今となってはかのグリマエルでの出来事はどれも遠い夢のように感じられる。記憶はどうにも曖昧で虫食いだらけ。映画の予告編じみたダイジェストしか残っていない。

鳥頭と笑わば笑え。だがそれでいい。むしろそれがいい。詳細を思い出せない夢がきっかけなら、それこそ逆行性に改変し放題ではないか。

多分に逆説的ではあり、我ながら情けない限りではあるが……二年前の大輔は充実とは程遠い境遇にあったからこそ、精神の安寧を得る必要があった。惨めな空回りの少年時代を波乱と激動の前世とすり替え、記憶の改変によるいわば人生の接ぎ木を行ってしまった可能性がある。多分にある。容疑濃厚だ。

ドリフトで揺れ動き続ける世界側から見れば、本来固定されている筈の大輔の心の方が揺れ動いているも同じ。世界から浮いて

揺れ動く自分であるからこそ、抛り所として頼れるような、変わらぬ基準として過去の栄光を求めたとしてもまったく無理からぬ話。

魔王の干渉による異世界追放説にせよ大規模ドリフト説にせよ、こちらの世界の大輔にとって都合良すぎるのだ。

事件で最も得をした人物こそが犯人である。証明終了。がつくり。

いやいや、だからといって落ち込む必要はない。

失われた栄光や都合良く改変された記憶などに縋らずとも、今の大輔は生きていける。

いくつもの出会いがきちんとしたバックボーンを与えてくれたからこそ、大輔は不自然すぎるグリマエルの記憶を夢と妄想の産物として切り捨てられるようになった。

かつての重症中二病患者は、現実への適応に成功しつつあったとも言える。

しかし。

その大小にかかわらず、決定的な何かは突然襲ってくるものである。大抵はちょっとした違和感とともに。そして時には強烈な頭痛とともに。

十

「なんぞこれ」

今回のやつはなかなか激烈だった。

「貴様らは一体何者だ、言ってみろ！」

「二はっ。セブテントリオン青少年教化隊であります」

早朝、校庭に整列した大輔達を前に、教鞭をしごきつつ声を上げているのは若手教師の一人。とってつけたような片眼鏡が似合わないことの上ない。

彼の発した問いに、十五人ほどの学生達が応えて唱和する。いちいち名前までは覚えていないが見覚えのある顔ばかり。いずれも陸奥家や竜胆家につらなる子弟のはずだ。

何をやっていた時だったかもさだかでないが、ドカーンと衝撃がおそってきたのだけは覚えてる。数日寝込んだ二年前ほどではないが、それでもしばしの間は意識朦朧となつてしまった。ちようと脳天にいいのを一発食らったぐらいの感覚だ。目から星がとび、頭上ではヒヨコがオクラホマミキサーを踊っていたに違いない。

そしてようやくと意識がはつきりしてみればこの有様である。

「宜しい。ではその任務は何だ？」

「「わが国の未来を背負う青少年達を内部から正しい道に導き、ひいては鬼へと墮する事を防ぐことです」」

一見とっぴく見えるあの先生、確か十二尉の一人（要するに斗流実戦部隊の将校）だった。見た目はともかく間違いなくやり手である。

しかし大輔の記憶にある彼は、もつと控えめでお人好しなキャラクターだったはず。間違ってもこうした勇ましい発言を好むタイプではない。

「よし。では貴様ら自身はどうだ、わが国と人類のために命を投げ出す覚悟はあるか？」

「「我らの命は我らのものにあらず。すべて黄金の君と白銀の君の御心のままに!!」」

「……なにそれこわい」

海兵隊ノリかと思つたら、どこぞのやばい宗教かつての。

どうも違和感が多い。あっちこっち色々々々ずれている気がする。

しかも相当に。

だが、白昼夢も妄想もドリフトも区別がつけられないのだから、こういう場合の対処法は一つ。唐突すぎる展開について行けないなら、適当にごまかしながら情報を収集するのが得策だ。

幸い、傍らにはいつもの相棒の姿がある。こういうときは実に心強い。

「しっ」

頼もしい相棒たる芳村睡蓮嬢が、コンパクトながら鋭い肘鉄を入れてくる。ツッコミにしては切れ味が過ぎるのが彼女らしい。

悶絶しそうになるのを懸命にこらえつつ、平然を装いながら改めてあたりを観察する。

眼前の景色をなぜ校庭などと認識したのか、そこからして奇妙だった。

そびえ立つのはコンクリートのビルではなく、石と煉瓦で作られたヨーロッパ風の城郭。足下は芝でも土でもなくクラシカルな石畳。

今にも巨人っぽいのが襲ってきそうな雰囲気、とでも言えば分かっていただけだろうか。ほら、例のワイヤーアクションな。

自分達が身につけている衣装もいつもの制服ではない。前近代的なデザインで生成り色ばかりが目立つ、いかにも実用一点張りの品物。そんな中でも、なぜか睡蓮だけはヒラヒラフリフリの十

字架ドクロの黒銀ゴスゴスだが、そこは突っ込むまい。

「もしや、あつちの世界なのか、ここは。」

懐かしさとともに、そして現在の大輔にとってはどうしても打ち消せぬ幾分かの不自然さ、据わりの悪さが沸き上がる。

「いやいや、白昼夢の可能性も十分以上にあるぞ。元々の設定が妄想なら、現状は妄想か夢しかありえないわけだし。」

「せつかくだから俺はこの夢の続きをエンジョイするぜ！」

「あんまり図にお乗りあそばされるなよ、そこの大勇者様。何を百面相やってる？」

「おおっと、早速教諭先生に目をつけられてしまったようだ。いや、有名人はつらいぜ。」

「幸運と舌先三寸で立てた手柄で勇者の名を得た若造風情が。戦場の矢玉はそんな称号など考慮してくれんぞ」

「ありや？ 風向きが怪しいな。」

「サー、イエスサー！ ご忠告、肝に銘じます！」

「ここはとりあえず長いものには巻かれる方向だろう。注…あくまでも戦術的な譲歩であって、ヘタレて日和ったわけではない。たぶん。」

教官殿（ここはこっちの呼び名の方が適切だろう）には胡散臭げな目を向けられたが、ともかく服従の意思だけは伝わったようだ。

信頼できる相棒であるはずの睡蓮は我関せずのすまし顔。さすが外面の良さは天下一品だな。

「ふん、相変わらず軽薄なやつだ」

大輔への興味を失ったか、教師はさらに訓示を垂れる。「いいか、鬼の脅威カスラより人々を守護するのが我ら北斗リネージュの血脈クリスタルの使

命であるが、だからこそ時として我ら自身が心を鬼にする必要もある。ゆめゆめ忘れることのないように」

さらに訓示は続くが、どうにも空気が良くない。具体的に言うと、軽蔑するようなみんなの視線が痛い。

具体的には、『無責任、だめ、絶対！』って感じ。これではちよつと前までの竜胆家での扱いと大差ないではないか。納得できない。

目前の中世的な光景からはどうしても懐かしのグリマエルが思い出されるが、いろいろと納得いかないところも多いな。

私の記憶が確かならば！ グリマエル時代の大輔はチート級の無双勇者としてブイブイ言わせていた筈だ。しかし教官殿や皆の態度はといえば、完全に無責任勇者扱いである。

「そこまで細かいところまではあまり覚えていないのだが……以前はこんな海兵隊鬼軍曹的な設定はあったらうか？」

夢としても、よもや現実のドリフトだとしても、大輔は無意識にでもこんな設定を望んでしまったのか？ だとすればまったく

我ながら日和りすぎだ。リア充に近づいた副作用か、中二力・妄想力の低下が著しいと見える。ガッツが足りない。

一方、教官殿や他の生徒達はガッツ過剰すぎ。意味の無い精神論に塗れた洗脳の訓示は小一時間も続いたが、それが終わるとすぐに集会はお開きとなった。

解散、のかけ声とともに教官も学生達も去り、大輔ともう一人だけが取り残される。こんな中身の無い話をするためだけに、早

朝から学生を集めていたらしい。ご苦勞なことだ。

教官殿の話の中には記憶にない固有名詞も随分多かったが、お

いおい確認していく事にしよう。しょっちゅうズレてるだけであつて、ここいら辺は慣れたものだ。

「行かないの？」

傍らに立つ相棒が首を傾げ、上目遣いに大輔を見つめながら言った。相変わらず睫毛長いな。

ずば抜けて小柄かつ華奢な体躯、強いウェーブの掛かった黒髪ゴシックロリータ風の衣装。よくできた人形を思わせる可憐な容姿の少女だが、中身は見た目の印象とはだいぶ違う。

▲また何か馬鹿なことをやってるのね。仕方ないから付き合せてあげるけど▽

と、相棒はいささかキツイ眼差しでそう語る。

社会不適合の出来ない相棒を見捨てないでもらえるとは、有り難いことだ。皮肉じゃ無いぞ？

「なあ睡蓮」

「ザッケンナコラー！」

一声掛けたその直後、日本語ネイティブらしくない怒声とともに、ほぼノーウェイトで脳天をひっぱたかれた。しかも身長差をカバーすべくジャンプ併用ときた。本気だ！

「スイレン？ 誰なのそれ。あなたの交友関係は完全に申告させてたはずだけど、何？ 謀ってたつての!？」

完全に目つきが据わっているが、なまじ見た目が愛らしいだけに、主人に吠えかかる嫉の悪いチワワめいた絵面になってしまっている。

言いがかりとしか思えぬ言いくさと態度は、だがじゃれ合いではない。少なくとも大輔の目には、本気で怒っているように見える。

うーむ。

先ほどからこれといって彼女の気に障りそうな事はしっちゃん

いはずだが。

これが単なる夢・妄想だとすれば、大輔自身が潜在意識では彼女を理不尽なやつと認識している証左となる。一方のドリフト実在説をとるならば、機嫌を損ねるようなことがドリフト前に起こっていたという可能性がある。

「いやいや何をおっしゃる、芳村睡蓮さん」

「……なによ？ ご主人様の名前まで忘れちゃったつての？」

いよいよボルテージが上がってきたと見えて、睡蓮が涙目になってきた。

訂正。彼女の牙はチワワのように小さくない。十分に大輔の喉笛をかみ切れる。

クールな容姿に似合わず親しい人間相手には簡単に怒りを表すが、実際にはそれほど怒っていない、というのがいつもの彼女だ。本気で怒らせると表面的には泣いたり落ち込んだりでむしろ静かになるが、一方で行動の方は著しく過激化する。これ以上怒らせては、「社会の害虫はこの手で責任を持って駆除する。それから飼い主のあたしも死んでお詫びする」とか言い出しかねない。生殺与奪を握られている相手に対しては、ひたすらに低姿勢あるのみ。それがダメ人間の処世術というのもの。

「すまん。俺は以前の戦いの後遺症で記憶障害を患っているな。

ごほっごほっ」

これは嘘ではない。変貌した世界でのこれまでの記憶を持っておらず、以前の世界での出来事を覚えてるのであるから、世界側を基準に見れば記憶障害としか言いようがない。

「だからそちらの可愛らしいキミ、できればお名前を教えてくださいませんか？ ああできれば俺の名前も確認しておきたい」

睡蓮？はぐすぐすと鼻を鳴らしながら所在なきげな表情を見せる。何者かが心の底で警鐘を鳴らし続けている。こいつはいかん爆発寸前。一刻を争う。

「……大丈夫なの？」

「ああ、こんなのは日常茶飯事だが、問題ない。俺はいい加減にできてるからな」

と、余裕の表情を浮かべつつ、胸をたたいて見せる。

自分の夢ながら現状認識ができない状態は不安だ。しかしそれ以上に、強気成分の不足した睡蓮を見ているのは実に落ち着かない。

「これ、ほんとに大丈夫なのかしら」

睡蓮？はしばらく迷っている様子だったが、大輔がせいぜい爽やかにと歯を見せて笑いかけると、大きなため息を一つ漏らした。

「わかった……ちょっとこっち来なさいよ」

「アイ、ママ！」

「下手くそな敬礼はいいから」

彼女に引つ張られて到着した先は校舎裏の小さな小屋。場所と大きいサイズといい、大輔の知っている紫城学園の体育倉庫と寸分違わないが、見た目はまるで煉瓦造りの中世ヨーロッパ風。

コンピュータRPG風に言うと、マップ自体は同じなのにマップの構成パーツだけがすべて中世風に変わったような具合だ。なるほど、それでここが学校だと認識できたわけだな、と今更納得。

睡蓮？が不思議なリズムで小屋の戸を叩くと、向こう側からもこれまた奇妙なリズムで叩き返してきた。さらに何度か戸をたた

くと、内側から鍵の開く音がした。

「私たちの仲間はどこにでもいる。灯台下暗しってね」

その諺はここでも通じるのか。実に適当な世界観。こりゃやっぱり夢説採用かな。

小屋の中には五人の人物がいた。男性が三人で女性が二人。いずれも同系統のデザインの（当然のように中世風の）衣装を身につけている。しかもどれもこれも紫城高で見た顔ばかり。

「おう、教化隊の集会はどうだった？なんか新しい動きでもあるのか？」

「いつものやつよ。無意味に気合い入れただけ」

一人が待ちきれぬ様子で声をかけてくるが、睡蓮？の端的な返事に肩を落とす。

「そうか、いっそ何か思いきった動きを見せてくれると助かるんだが。正攻法での締め付けが一番きついな」

「時間はあいつらの味方だものね」

「この一月で仲間が三人減ってる。このままじゃじり貧だぜ」

「検挙されて矯正された方がオーガになるよりマシだって思う気持ちも分らないはないけど」

「信頼できる同志こそがある意味一番危険なんだね。皮肉なものだよ」

五人の表情は浮かない。会話の端々に深刻かつ剣呑な雰囲気がかかっている。

とはいえ部外者の大輔には何の話題か分からないので、聞き流すぐらいしかできないのだが。

これでは主人公のくせにまるで置いてけぼりの脇役だが、詳しい状況が分からないのではどうしようも無い。

しかし雑な設定だ。町並みはどいつもこいつも顔立ちはいかに日本人(約一名、睡蓮除く)。会話に使われてる言語も露骨に日本語ときた。ある意味、御都合主義ファンタジー世界そのものとも言えるが。

かつて勇者様ダイナスをやったグリマエル世界はどうだったろうか。いや、むしろ日本で会話に苦労しなかったのだから、日本でこそグリマエルの言葉が話されている方を奇妙に思うべきなのか。

詳細な比較を行おうにも、ダイナス時代の記憶が色々と曖昧なのが惜しい。

「おいおい、ぼけーっとしてるなよ」

お座敷ではなく苦情の声がかかった。

「同志達みんなの運命がかかっているんだよ。まじめにやってよ勇者様」

「まさかダイナスのやつ、裏切るつもりじゃないだろうな」

ダイナスねえ……ダイナス、だど!?

「おい、俺はダイナスなのか!?!」

そこそこ大事なのが。

慌てる大輔をよそに、五人と睡蓮?のため息が見事にハモる。

マジか。マジなのか。

「裏切りを誤魔化すならもっとうまい言い訳があるでしょ。このアホは何も考えてないわ」

と茶化すように言う睡蓮?の両肩をがっつつかみ、目一杯真剣さをアピールしつつ質問をぶつける。

「はひっ?」

「名前だ、名前! 睡蓮じゃないって言ったよな?」

「そ、そうよ」

大輔の手を必要以上に鋭くびしりと振り払うと、両手に腰を当てて、

「私はエルフレリア。スイレンなんて名前じゃないわ」

と名乗り、

「それにあんたはディナシウス・ユーリヒト・パーシオン。思い出した? 若ボケ勇者さん」

と宣った。

大輔では無くダイナス、睡蓮ではなくフレア。

無くしたはずの名前、そしてこのファンタジー風の光景。

認めたくはない。認めたくは無いが、大輔がダイナスならば、やはりここは日本ではなくグリマエル世界である可能性が高い。

とすれば、二年より前の記憶とともに捨て去ってしまった、「転生前」の世界に、いま大輔は立っている事になる。

「……まじですか」

さすがの大輔も呆然とせざるをえない。現実ならシャレにならない。夢か妄想なら未練がすぎて情けない。

「記憶の混乱。オーガ化の兆候じゃないのか?」

「こんなところで化身されたら事だぞ」

リーダー格らしい少年が目配せ。棍棒にナイフ・それに短槍。

小屋のあちこちから取り出した得物を手に手に構える学生達。

こんな殺伐としているのに手慣れた雰囲気で、彼らにとってはどういう荒事が日常茶飯事のように。悲しいけどこれ現実なのか?

自分と相棒の姿を改めて確認する。

……

あー、ありえんな。

つまり、

「どうやら俺はまた都合のいい夢を見ているらしい。うん。納得した」

面倒くさいときはとりあえず都合のいい解釈、だな。

「なら本当に眠らせてあげる！」

睡蓮あらため自称エルフレリアの怒りの一撃が鳩尾に突き刺さり、大輔は昏倒した。

頬に当たる平手の感触で意識を取り戻す。痛い。

「今度こそちゃんと目が覚めた？」

勇者の弟子にして相棒を名乗っているのは、どう見てもやっぱり睡蓮。わざとらしい怒りの形相で凄まれるが、そんなものでは騙されん。

「いや、俺はまだ寝ている。続きを狙って見られるとは知らなかったが、こりゃやっぱり夢だ」

「寝言は寝て言いなさいよ」

「だいたい、なんで今更グリマエルにいる。なんで俺がダイナスで、おまえさんがフレアなんだ」

まず、視線が低すぎる。ファリメウルに飛ばされて力を失うまでは、大抵の人間は見下ろす対象だったはずだというのに。周りの男子生徒と普通に目が合う。

腕には贅肉こそないが、肘を曲げてぐっと力を込めてもさほど盛り上がらない。鍛冶屋にして剣士にして武闘家にして魔術師。

神のごとき勇者ディナシウスの腕はこんな貧弱じゃなかった。

それに、グリマエル時代のフレアももっと長身で大人っぽかつた。

目の前の貧相なちんくりん体型はあっちの睡蓮そのものだ。

こんなので元に戻ったと言われても困る。

「はあ？ 逆だったら目もあてられないでしょうが」

「そういう言う意味じゃないが、確かにそれは悲惨だな」

見た目が睡蓮でも中身が自分じゃ可愛くも何ともないし、見た目が大輔で中身が睡蓮では気の毒すぎる。

「だからこれでいいのよ。似合わないんだから哲学的な事とか考えないの」

あるがままを受け入れろ、か。

確かに、夢の中だろうが大規模ドリフト後だろうが、名前が変わるうが姿が変わるうが、自分が大輔でありダイナスでもあるのは実感的には明らかだ。ならば思うように行動するまで。

「なるほど。得心した。さすがフレアだな」

「ほ、褒めても何も出ないわよ。って、撫でるな！」

「おっと失礼」

頭の位置がちょうどいいところにあるので、つい手が出てしまふ。

「撫でるんなら最後までちゃんと責任もって撫でなさいよ！ ったく使えないわね！」

やめたらやめたでやっぱり怒られるわけで。実にわかりやすいツンデレ反応。これでこそフレアだ。

「……………」

ふと、周囲の空気が変わっているのに気づく。

今の今ですっかり忘れていたが、直前まで肩を怒らせ得物を手に手に大輔を警戒していた連中がみなぐったりと脱力している。

「あ、あほくさ」

「いつものお間抜けな夫婦漫才じゃねえか」

「完全に平常運転よね」

「ばかばかしい。つきあいきれるか」

好意的かどうかは別にして。誰もが呆れを隠そうともしない。

「そのポケ勇者は任せたわよ、フレア。相方なんだから元通りに修理しておいてね」

「ちょ、ちょい待って！ あんたらも手伝ってよ！ 見捨てるな〜！」

先ほどから見ている限りでは、こちらの睡蓮、いやフレアは大輔以外の前でもかなり素を出している。

素の彼女は、お嬢様然としたすまし顔よりよっぽど魅力的なのだ。体面など気にしなければ、変に敬遠されたりせず楽しくやれるに違いない。いい傾向だ。

夢か妄想の中の彼女だからこそ大輔の都合通りに行動しているのかもしれない、と言われてしまえばそれまでなのだが……。

そもそも大輔の記憶にあるグリマエル世界とはだいぶ情勢（設定？）が異なっている気もするが、何しろ最近では積極的に忘れようとしていた記憶だ。細部が曖昧かつ妄想で補完されてしまっているの、記憶がおかしいとも目の前の光景がおかしいとも定めがたい。とりあえずは記憶の方が間違っているってことにしておくのが素直というもの。

つまり、最初と何も変わってはいない。今やるべきは、今できることは、虚心坦懐での情報収集だけだった。

ここに集まっているのは、何かのつびきならぬ事情に対して、目的をもって集まっているグループであろう。そして大輔とフレアがその一員らしい事までは分かる。

その後「あらためて情報を整理したい」との名目で、小一時間ほどかけてフレアやその仲間達から詳しい状況を聞き出したところ、想像以上にややこしい状況になっている事が判明した。

先ほどの教官の台詞にもあった『北斗の血脈教団』というのが、^{リネンチチチ}あつちの世界における斗流に相当する組織らしい。

彼らの話を聞く限りでは、所属している人物もほとんど変わっていないように思える（大抵ファンタジー風の名を名乗っているので、根拠はあくまでも大輔の推理と想像だが）。しかし、組織としての性格はだいぶ異なるようだ。

社会に対して強い影響力を行使している点はファリメウルでの斗流と同様だが、最小限の干渉で社会を陰から支える斗流に対し、セブテントリオン教団はより直接的に支配力を発揮しているといえる。

その一端が『青少年教化隊』。現役学生のメンバーからなり、所属する学校の生徒達を内部から指導する組織だ。同様に各町会と密接に関連する『成年教導団』や、教団に協力する社会的成功者達のサロン『ドラゴンズクラブ』というものもある。いずれの下部組織も、「鬼の脅威から人類を守るための正しい振る舞いを身をもって示す事で、草の根レベルから人々を導く」という思想を元に成り立っている。

もちろん、そんな露骨な干渉を面白くないと考える人間もそれなりに存在する。教団による統制がそれなりの効果を収めている事を認めながらも、お節介だ気持ち悪い、という自らの感性に逆う事を良しとしかかった人々だ。

「押しつけの正しさなんてまっぴらだ。自分勝手に間違える自

由サイコー！間違えてピンチになったときに守ってくれさえすればそれで十分！」と言ってしまおうとかにも青臭い思想のように聞こえるが、中二病を自認する大輔的には気持ちはずからなくもないといったところ。しかし教団はそんな感傷を許すような甘い組織ではない。

市民の生活態度や思想傾向は徹底的に調査され、自発的な相互監視も推奨されている。これらはいずれも「鬼化」の兆しの早期発見が目的とされている。実際に危険な兆候が認められた（とされる）人間はたちまち官憲によって連行され、間違っても鬼に墮ちたりしない（とされる）模範的市民となるまで徹底的に「修正」される事になる。

人間社会の内部から発生して猛威を振るう鬼対策としては確かに効果的だろうが、彼らの言い分だけを聞く分には魔女狩り全盛の暗黒時代とあまり変わらないようにも思える。誤解を覚悟で言えば、健全化を追求しすぎて不健全になってしまったような、いわばディストピア的な雰囲気さえ感じられる話だ。

そんな状況の中でなお積極的な反抗を選択した人々が数は少ないが存在し、この国の諸処で地下抵抗組織を形成している。その最大の一つが、教団のお膝元たるこのジェムズヒルズの町を拠点とする『オーガヘッド』である。鬼から守らんと人類を統制する（と自称する）組織に対抗しようとして、人類の大敵である鬼を旗印にしてしまう趣味の悪さについてはあえて追求すまい。

しかもおもしろいことに（？）、帝国首都たるジェムズヒルズの教化隊中核メンバーの一員であるはずの大輔と睡蓮（ここではダイナスとフレアか）は同時にオーガヘッドの構成員でもあるのだそうだ。学内における『鬼頭』の隠れ家の一つであるこの場に

二人がいる理由がこれだ。

過去のダイナスが何を考えていたのかは分からないが、この裏切り行為はオーガヘッド側にとっても都合良かったに違いない。かつて勇者の称号をもって教団より表彰されたダイナスだからこそ、きたるべき大反抗の暁にはイメージリーダーの働きを期待されているといったところだろう。

まあ、ここまでいい。よくはないが、正直なところ大した問題ではない。

敵に回している相手こそが大問題だ。

「こいつがポルフィラ帝国の支配者、吸血女帝、アウリーナ。多数の眷属従僕を従える。我々にとって最大級の脅威の一角だ」

羊皮紙に描かれた似姿は本物の彼女が放つ強烈な印象の三分の一も表していなかったが、人間離れたカリスマの持ち主である事を理解させるには十分であった。

つーか、あんなのが何人もいてたまるか。

くすんだ金茶色とギラギラのド金髪、地味なチャバネブレザーと豪華なドレス、ベレー帽と宝冠という違いはあるが、地味だがきりりとした硬質の美貌はどこからどう見ても紫城高の生徒会長、南山晴蘭その人であった。

ファリメウルでの大輔が自らを高める上での仮想敵と見なしていた人物であり、性格はまさに秩序マシーン。見た目通りの正義の女神と言うには無愛想すぎる人物だ。それがどれほど理不尽であっても、決まり事には淡々と従うことを良しとする。彼女の辞書には臨機応変やら清濁併せ吞むといった類いの単語は記されていないとみた。

「うわ、吸血鬼役とかピッタリすぎる」

「そうだ。奴らは化け物の分際で人間の保護者・管理者を気取っている。我ら市民の自由を奪い弾圧し、彼女を頂点とした完全なる秩序を打ち立てようとしているんだ」

大輔の知る限りはそういった陰湿な陰謀論とは無縁な印象の人物だったが、彼女自身にその気がなくても多少の妨害など無意識に排除してしまうだけの才覚にあふれていた。吸血鬼なんて面倒なバックグラウンドが加わってしまっただけなら厄介だ。

「それから、こいつがもう一人の最大脅威。セブテントリオン教団の姫巫女アルジェンティーナ」

「うげ」

今度は声が出てしまった。

緩い三つ編みに編まれた銀髪に董色の目。一見して清楚かつ素朴な印象だが、大輔にとっては畏怖の対象でしかない。

よりによって新川詩紀嬢。大輔にとっては主筋も主筋。白銀珠比女命の称号を持つ、斗流の現宗家じゃないか。

「アウリーナと並ぶこの国の共同統治者と言っていい。秩序から脱落した者どもを鬼と見なして狩るものたちの頭だよ。そいつら自身が化け物の分際でな」

あー、それを言われるとダイナスもまさに同類なんだが。一応は鬼憑きと言われている立場だし。

ちなみに白銀の少女ってのは某国名そのものの単語だったりするが、詩紀嬢には怖いぐらいにピッタリくる名前だと思われ。さらに言うなら、生徒会長が生来の金髪を染めて隠しているのは公然の秘密である。対になるのが黄金の娘なら、紫城高の金角銀角の異名とも合致する。やはりかの二人で間違いないだろう。

「奴らはグルだ。存在もしない墮鬼現象の抑制なんてものを口実

に、心ある市民達の行動を縛り、抵抗運動を弾圧して権力を盤石のものにしようとしている」

「存在しないって？ 実際に起こってるんじゃないのか？」

向こうの世界では墮ちた鬼が人を害した事象は枚挙にいとまが無いし、先ほども何人もオーガになったとか言ってたと思うのだが。

「そんなものは欺瞞だ。ポルフィラの国土、いや全世界全体を覆う姫巫女の呪詛の仕業に違いない。天下の悪法たる道德法に従わぬ者は片端から摘発され、その大半は鬼化したとの口実で獄中で処刑されているのだぞ。奴らに従わないものが次々と鬼に墮すなど、為政側にとって都合が良すぎるではないか。それこそ奴らの陰謀の証拠だ」

隠れ家に集まった学生の一人、サイラスは拳を固めて打ち振りつつ、そうまくし立てた。

このサイラス君、ここリーラエシユロス校内でのオーガヘッドの活動を率いている人物らしい。見た目だけならインテリっぽい兄ちゃんだが、顔を真っ赤にして気合いたつぷりに叫ぶ様子からは頼もしさよりもむしろ危うさを覚える。

どうも無意味に力が入りすぎなんだよな。自分の言葉に反応しては興奮してるし。敵対しているはずの教官殿と同じようなオーラを感じる。

正直苦々なタイプだが、陸奥一族にも結構多かったな。飄々とした十悟先生なんてのはむしろ例外と言えるし、一族内部での評価は能力に比して決して高くない。大輔への評価など言わずもがな。実際のこのサイラス君も、向こうの世界では陸奥家傍流（ちなみに竜胆より格上）の御曹司だったはずだ。名前忘れたけどな

(笑)。

そういうわけで、この手の輩の扱い方はだいたい心得ている。こちらとしては嫌われても軽蔑されても痛くも痒くも無いのだが、重要な決定にまで私情を挟まれがちなのが困る。とりあえず軽薄な対応だけは避けた方が無難だろう。

「人は鬼に変わる。少なくともここまででは誰もが認める事実って事でオーケー?」

いかにも短気そうなサイラスを無駄に刺激しないように淡々と、しかしはっきりと大輔は断言する。これまでファミメウルでも何度も見てきた事だ。

「確かにそうだが、それには魔女アルジェンティーナの悪意が!」

どうしても自分達が弾圧されていると考えたくて仕方ないようだ。陰謀論乙!

「いや、お姫様の関与は否定しないよ。あのお人なら十分に可能だからな」

ただ、そんな真似を好きこのんでやらかすとは思えないのだ。

こちらの白銀姫のメンタリティーが大輔の知るかの詩紀嬢と同じであれば、だが。

「でも、こちらはいかにも小所帯だ。自ら手を下そうと考えるほどの脅威と感じてもらえてるかね?」

抵抗組織風情が自惚れすぎではなからうか。寛容だとか鷹揚とかいう単語が適用される以前のレベルだ。きつと歯牙にもかかけられてない。

斗流十家第六位陸奥一族のさらに傍流の一人に過ぎない大輔ではあるが、鬼憑きの端くれとしては詩紀さんのバケモノっぷりを痛感している。

白銀珠比女命というのは奇跡を具現化するシステムの中核ではあるが、巨大な力を好きに行使できる魔王というよりは、巨大すぎて扱いに困る力をうまく制御する事を期待される立場。いわば祟り神を慰める巫女のようなもの。そんな危なっかしい力を反抗組織の一構成員の排除に使うなど、鶏を裂くに牛刀の類いだ。人間社会のただ中に鬼を出現させたりすればまず確実に二次被害が出るわけで、好んでそんな真似をやらかすほどお馬鹿じゃなからう。害意から無意識に身を守ってる結果って可能性はあるかもしれないが、それでより危険な鬼を作り出してしまっただけならとっても面倒ごとでしかない。

国家元首や国教のトップともなれば、陰からの支配者であった斗流宗家以上に直接的な権力を動かせる。直接動員できる人員はあちらの世界の数倍では効かないだろう。悪意を抱く人間を感知できるのであれば、呪いをかけるなんてかったるい真似をするよりも、役人を送り込んで片っ端から捕縛した方が手っ取り早くて確実だ。

そうそう、問題の道徳法とやらだが、内容としては別に特段おかしい事を言っているわけでは無いようだ。

愛もって人に接しましょう。欲望に流されない強い意志を持ちましょう。社会秩序の保持に努めましょう。勉強を怠らず知恵身につけましょう。身の程を知り人を敬いましょう。人を騙さず誠実に生きましょう。家族や仲間を大切にしましょう。身嗜みを忘れずに。エトセトラエトセトラ。

こんなのは八丈伝のアレ程度のもので、まるっきり標語レベルだ。あっちの世界で生徒会長がご執心だった校則の中身と大差ない。

確かに抽象的すぎるし、いちゃもんつける形で運用されるとかなりまずいのは間違いないから、そこらへんが実際どうなのかは一応確認しておきたいところだが。

現実的な危険性がないのなら、自分に向けられた悪意ごときにいちいち興味を示すとは思えない。会長にしても宗家にしてもそういうタイプの人物だ。まあ、身近な人物に危害でも加えられたのなら別だろうが。

「この際戦力の大小は問題では無い。断じて行えば鬼神も之を避くという。我らの断固たる意思こそが奴らに脅威を感じさせたのだらう。きつとそうだ。つまり奴らは恐れをなしたのだ！」

サイラスは自分のアイディアに自信を得たようにそう言うが、希望的観測どころかやけくそな強がりにはしか聞こえない。あの人達をその気にさせていたら、今頃オーガヘッドの誰一人として生きてはいないだらう。

脅威度は低いが規模だけは大きい組織を下手につぶすと、分裂して動きが読めなくなりかえって面倒なものだ。とくに全貌を把握された上、無害認定されて放置されてるところでは無かるうか。それどころか、組織の統制を強化するためにコッソリと力を貸すぐらいの事をやっても不思議は無い。

そこまで考えてたところで、突然腑に落ちた。大輔達がいる理由だ。いかにも新川のさおりさんあたりが好みそうな手段ではないか。

フレアに眼で問うてみると、小さく頷きを返してくる。やはりそうか。

勇者の端くれ的には、鬼の脅威にさらされる民人達のために微力なりと尽くすべき場面だろうな。

「まあ、過大評価で勝手に恐れをなしてくれたのなら、それはそれで助かる。だが、墮鬼現象頻発については連中にとっても予想外の出来事って気がするな。これは俺のカンだがね」

さすがに原因が分かかっていて放置していると言うことは無かるうが、何らかの理由で制御しきれないというのは考えられる。オーガヘッド内で特に多く起こっているというのが本当を含め、宗家側と情報をつきあわせてみたい。

「ツテをたどって一度探りを入れてみようと思うが、こちらでつかんでいる情報についても一通り教えてくれるか」

果たしてサイラス氏の反応はといえば。

「探りだど!? 生ぬるい! 敵はこのような卑怯な手段に訴えねばならぬほど追い詰められているのだぞ。今こそが好機だ。ここで攻勢に出ずしてどうする!」

などと急に強気な発言を始めた。

好機ってあんた。

「その攻勢の最中に、内輪に何人か鬼が出たらどうなる。統制どころじゃ無くなってあつという間に制圧されるぞ。せめて何らかの法則ぐらい突き止めてからにしちゃどうだ」

「ふん、心配は無用だ。ひとたび戦端さえ開かれたならば、指揮系など失われようが関係ない」

大輔の指摘にも、あくまでも鼻息の荒いサイラス。何か腹案でもあるのだろうか。

「ここはリーラエシユロス支部だけでも早急に行動するべきだな。戦力的にどれほど不利でも断固として闘争を遂行する革命戦士達の姿は、心ある市民達にとっていわば決起の狼煙となるからだ。世界中の潜在的な同志達が呼応したその時こそ、圧倒的な戦力に

怒りメーター振り切つてぶち壊れたか？

いや、大輔はこの現象を知っている。この乱れた気は、既にヒトのそれではない。変化の前兆だ。

「全員すぐにここを出ろ！ やばい！」

しかし誰もが大輔の叱咤にも反応できず、目の前で起こっている現象を呆然と見つめるばかり。

せめてフレアだけでも手を伸ばすが、ただ一人既に行動を起こしていた彼女はそれをすり抜ける。

しかし向かった方向はむしろ正反対。

「てえええい！」

彼女は小さな体軀を生かして長身のサイラスの懐へと飛び込むと、背中からの体当たりで自分に倍する相手を石壁へと叩きつけ、貴重な数秒を稼ぎ出してくれた。

持つべきものは腕の立つ相棒。男女同権いやレディーファースト。大輔は本来頭脳労働担当。そして平和主義万歳。

「変身バンク中は手を出さないのがマナーだろ」

「意味分らんこと言ってる暇あったら体動かす！」

フレアの言うとおり、墮鬼化中の今こそが好機。

当然ここは逃げの一手。二人同時の体当たりで隠れ家の扉を破り、飛び出す。

団員達はいまだ絶賛茫然自失中だったが、逃げられるかどうかは彼ら次第だ。大輔もフレアも偽善者ではないから、口先ばかりのド素人とはいえ、自ら武器もって戦うことを宣言した連中の面倒までみる義理も無ければ余裕もない。

斗流の末席に身を置く大輔にとっても、ろくな準備もなしに手を出せるような相手ではないし、フレアにしても軽口ほど余裕が

あるわけではない。鬼というのはそれほどの脅威だ。

続き、遅ればせながら団員達が転がり出してくるのを確認。ほつとすると同時に状況の悪化を理解する。

さっきまで仲間として話していた連中が目の前で貪り喰われるのも寝覚めが悪いが、脇目も振らずに鬼に向かってこられるのもこれはこれで困るのだ。

「ちっ、せめて時間稼ぎにぐらいなささいよ」

傍らで舌打ちが聞こえる。大輔が直接的表現を避けていた部分が、これ以上無いぐらゐる露骨に言語化される。

「奥ゆかしさ重点な」

素直に本心出すのは嫌いじゃないが、こういうシーンでは世間体世間体。

現実逃避はこのぐらゐにしよう。酒呑童子級の相当に強力な鬼が目の前に迫っている。元に戻すとか懐柔するとかいうコマンドは選択不可、というかバッドエンド直行必至。機動性でも人間を圧倒的に上回っている。武器を持っただけの素人など、立ち向かったところで焼け石に水だ。

ほら出てきた。しかも予想より早い。そして当然のように無傷。気を纏った「靠」をまともに喰らってなお、平然と動いている。咄嗟のことで気の練り込みが不十分だったとは言え、八〇キロで走るリムジンに衝突されたのと大差ないはずだが。

どうしたものか。丈司さんのように強力な鬼と真っ向から戦えるだけの技術や武装を持っている大輔ではないし、絵莉華さんや樹菜さんのような直接的火力を発揮できるフレアでもない。

うちの相棒ときたら、特技は即死マップ兵器オンリーというどピーキー。しかるべき準備もなしに『茨の園』なんぞ発動させた

ら、鬼が暴れた方がよほどマシという惨状になりかねない。

墮鬼現象が頻発しているというのなら、こういう急襲も予想してしかるべきだった。セーブのために入った宿屋で中ボスクラスにランダムエンカウトとか、雑な洋物ロープレかっての！ クソゲー認定！

「で、どうすんのあれ」

「任せておけ。俺にいい考えがある」

「いかにも失敗しそうなんだけど」

鋭いなあ。

サイラスの鬼は今も所在なげに身体を揺らしているだけだが、こういう態度は強力な鬼の常だ。ひとたびスイッチが入ったら殺戮マシーンになるのは、斗流の人間にとっては常識。

さっさと逃げたいのは山々だが、簡単に逃がしてくれる相手ではない。

下手な動きは鬼の注意を引くだけの結果となる。この状況で背中を向けること自体が自殺行為だ。

視線が逸れたタイミングで、少しずつ距離をとる。命がけの「だるまさんが転んだ」だ。

「せこ」

とフレアの視線が語るが、彼女自身しっかりと大輔の動きについてきている。さすがは相棒。

我慢できずに大声を上げて走り出してれる奴が居れば、そいつが喰われている間に逃げられるのだが、さすがにそこまでのアホはいない様子。B級モンスターバニクムービーのようにには行かないか。

こうなると、あとは運頼みだが。嫌な予感が背筋をちりちりと

這い上がってくる。

ほーら、こっち見た。

「いやー、運はいい方だと思ってたんだが」

踵運と離ればなれにならなかった時点で、運を相当消耗しちまったかな。

大輔をロックオンしたサイラスの鬼が、跳躍に備えて巨軀を沈める。

まずい、まずいぞ。

猶子は約三秒。それ以内に何らかの画期的な逆転的戦術を用意できなければ、まず死ぬ。

思考が加速して、一秒が十秒・百秒にも感じられる。考えろ。考えろ。考えろ。

だが知識も不十分なら、戦術的センスも決定的に足りない。しかも加速しているのは感覚と思考だけだ。どんな方法を思いついたとしても、行動を起こすだけの時間に乏しい。

……どれだけ時間があっても何も思いつかなければ、生殺しと同じか。

もう間に合わないと思った時。無意識の間に、大輔は傍らの相棒の手を取っていた。

「ダイナス!？」

自分が咄嗟に何をしようとしていたのかは分からない。少なくとも、庇おうとしたのとは違う気がする。

「尚書」がアカシックレコードに繋がっているのなら、大輔自身の知らない知識も持っているはずだ。例えばサイラスの鬼の特定の弱点とか、そういうやつだ。

そこら辺をたどって、この状況を何とかしようとしていたのか

もしれない。だがそんなものは結局必要なかった。
なぜなら、サイラスの鬼の攻撃が大輔達に届くことはついに無かったからだ。

大輔の加速された感覚は、その一部始終を観察していた。

四方より投射された術は八つ。そのうち三つが回避され、一つがレジストされ、三つが鬼に命中して手足を一本ずつ縛った。

あのクラスの鬼に対し、人間の術による束縛などそうそうは保たない。持続時間は数秒がせいぜいだ。

空中でのバランスを崩して明後日の方向に落下する鬼の身体が地に着くより前に、予想着地点めがけて次の結果がかぶせられる。四人がかりによるその結果術は鬼に対するものではない。

回避不可能な着地の瞬間を狙って二方向から、長槍の攻撃。しかもただの突進ではない。カタバルト役二人が槍を持ったままの誘導役を射出し、速度と命中率を確保していた。いづれ名のあろう魔法の槍二本がわずかな時間差をつけて撃ち込まれた事で、炎と雷が鬼を包んで荒れ狂ったが、前もって編まれた複合結果が周囲への被害を限局しきった。

かかわった人数は多いが、ただの人海戦術ではない。教科書的な完璧な飽和攻撃。

相手の性質を正しく把握した上で、動員できる人数を徹底して生かし、まぐれの入る余地を局限まで減らす。相手の最高の力を限界まで引き出すとか、寡をもつて衆を制すとか、そういったギャップル要素やロマン成分とかゼロ。まさにプロの仕事だった。

間髪を入れず、四方八方から姿を見せた黒服のお兄さん達が事後処理に忙しく駆け回り始める。

この手際とセンスは、あれだな。こっちの世界では何と呼ばれ

ているのかは分からないが……

「対象の完全消滅を確認」

「周囲の被害ありません」

鬼使いや鬼憑きや特殊能力に頼らず、訓練された『人間』だけの力でもって。酒呑童子級の鬼を完膚なきまでに撃破というパフォーマンスを成し遂げたばかりだというのに、歓声もガッツポーズもなく。関係者の誰もが完璧に冷静を保っている。

「了解」

やっぱり、見覚えのある顔ばかり。報告を受けているリーダーは完璧な戦果を前にして苦虫を噛みつぶしたような顔だが、あの人はいつもあんな感じだしな。

って、石丸さんじゃないか。

『檣』のAチーム（通称花組）の実力のほどは、こちらの世界でも健在というわけだ。取りあえずはこの場合は任せられるだろう。

「騎士クライセンシュタイン！ 教導騎士団!？」

オーガヘッド団員の一人が、不信感の込められた声を上げた。

ああ、こっちではそう呼ばれてるんだな。お墨付きを与えられた青年教導団の実働部隊、皇帝につらなる特務部隊、あるいはセプテントリオン教団の私兵をあわせたような立ち位置だろうか。こんなところで当たらずといえども遠からずだろう。

世界からずれてばかりいると、こういう推察や状況適応能力は自然と鍛えられてくるものだ。全然自慢にならないが。

「また、またも貴様らかーいくら何でもタイミシングが良すぎる！」

「そうか、同志を確実に抹殺するため、呪いの発動を待ち構えていたのだな！」

「同志ドニャーブルの仇、同志ヘンデルの仇、そして同志サイラ

スの仇！」

「平然と人を殺す魔王の手先ども！」

四人に目減りしていたオーガヘッド団員達（もちろん大輔とフレアをのぞく）は、自分たちが口にした妄想によってさらに怒りと興奮をかき立てられていき、

挙げ句、完全武装の教導騎士団に向かって粗末な武器を構えるに至った。

をいをいをいをい。

鬼の脅威から救ってくれた相手に言う台詞じゃなかろうに。しかもこちらを捕縛できる能力も、おそらく権限も備えている相手にだ。

売れ残りの売り言葉を自分で買い取ってるんだから世話はない人間ってやつはこうやって後に引けなくなっていくんだな。

そもそも、教団に対して抵抗しようと考えるまでは勝手だが、それをこの場で口に出してしまった時点で愚の骨頂だ。5倍の数の武装した大人相手に勝ち目があるとでも思っているのだろうか。しかも、ただただ憎い相手を攻撃したいってだけで、今にも殺そうとしているという自覚も、殺せるだけの覚悟もないとみた。ついカッとなってやった。今は反省している。って事になるのがオチ。

感情的になって目的を見失っては為せることも為せなくなるのだから、簡単に後悔するぐらいならここぞという時以外には自制すべきだ。確固とした信念でなく一時の感情のはけ口としてカジュアルに抵抗運動なんぞやってるからこういうことになる。

などと分析してきたが、

「こいつらアホだとは思ってたけど、まさかここまでとはね」

フレアにかかっては一言でばっさりだった。

「言ってるなよ。気の毒に」

アホでも間違っても、それなりに真剣ではあるんだからさ。それに引き替え、彼らの敵意の対象となっている教導騎士団の方はと言えば。

石丸さんはまあいつもの仏頂面だが、その他の団員達は口元をいささか引きつらせながらも、若さ故の過ちというやつを生暖かーく見守っている。武器を構えるどころか、腰に手をやろうとすらしない。

「さあさあ、まずは武器を手放しなさい」

「怖かったろう。もう大丈夫だから」

「君たちに被害がなくて良かった」
 実力に裏付けられた自信があっても、理不尽な敵意と武器を真っ正面からぶつけられれば先制攻撃で危険を排除したくなるのが自然な心の動きだ。

それを抑えつけて、手をさしのべられる。大人だ。ちゃんとした大人だ。

抵抗勢力を弾圧どころか、こうまで罵られつつも守ってやるのだから。ほんと、ご苦労さまです。

こうなると、オーガヘッド自体お上のお情けで存続を許されてるって線が濃厚だな。いちいち相手にするのも面倒なので適当に泳がされているか、あるいは時々手を噛む反抗的なわんこぐらいにしか思われていないのかもしれない。

が、甘やかされたわんこは調子に乗って態度をエスカレートさせていくもの。

「学園への公権力の介入を許すな！」

「帰れ、帰れ、帰れ！」

石畳を踏みながらの帰れコールに、集まってきた野次馬達加わる。

「かえれ、かえれ、かえれ！」

「カエレ、カエレ、カエレ！」

集団心理が人数と興奮度と騒音レベルを増幅させる。絵に描いたようなポジティブフィードバックで、ネガティブな感情がふくれあがる。

向こうの紫城高って曲がりなりにも進学校だ。ここまで単純な奴らばかりじゃなかったと思うが。しかも、学年も性別も違うのに、判で押したように同じ行動パターンである。モブというかNPCというか、その程度の個性しか感じられない。

こんなところまでドリフトの影響が及んでいるのか。それとも二次的・三次的な波及効果か。はたまた大輔の想像力の手抜きか。いずれにせよあまり健全とは言いがたい光景だ。

「人の心を持たない悪魔の手先どもに死を！」

「今こそ断固たる鉄槌を！」

「死ね、死ね、死ねえ！」

「殺せ、殺せ、殺せえ！」

ストレスが判断力を減弱させて選択肢を狭め、行動を先鋭化させるって聞いたことがあるな。とすると、普段どんだけストレス貯めてるんだらうな、こいつら。

しかしこりゃいよいよ危険水域だぞ。後先考えていない連中にはいけませんか。後先考えていない連中にはいけませんからね。

いかに達人揃いでも、自分たちに倍する人数の学生を怪我させずに取り押さえるのは難しいな。何かの拍子に火がつく前に

そーっと抜け出すのが一番だろう。

逃げてばかりの勇者だった？ それで結構。大輔は一時のブライドより自分の安全を重んじている。なにしろ自分一人の命じゃないもので。世界の運命とかそんな系が大輔の双肩にかかっている。

タイミングをあわせるためフレアと目配せをかわすが、残念ながら一瞬遅かったようだ。

矛先がこっちに向く。

「おい勇者！ お前ら、なぜそちらにいる!？」

そりゃまあ、ねえ。アホの一員だと思われたくないから。

「サイラスの言ったとおりだ。勇者とその女はやはり裏切り者！」

「裏切り者を粛清せよ！」

「粛清、粛清、粛清！」

「殺せ、殺せ、殺せ！」

大輔達の危機を察知した教導騎士団が、二人を守るように囲む。勇者ダイナス。ここは我々に任せて早々に脱出しまえ」

石丸さん、いやクライセンシュタイン卿が無愛想に言う。

騎士団に守られる勇者つてのも、ねえ。我ながら情けないとい

うか。

「俺たちはプロだ。自分たちの身を守るだけなら何とかなるが、足手纏いはいらん」

言う言う。

「世界への希望を失っていない若者に、学友を傷つけさせるわけにはいけませんからね」

「そうだな。手を汚すのも恨まれるのも俺たちだけで十分だ」

「学生勇者殿に頼るほど落ちぶれてはいないさ。教導騎士団を舐

めてくれるなよ」

泣ける。泣けてくる。学内での鬼化事件に早々に介入したのには、そういう意味もあるのか。

彼らが口にしてるのは、大輔達を促し安心させる言葉であると同時に、自分たちへの鼓舞だ。怖くないはずがない。精神的には鬼を相手にするよりよほどきついだろう。

この人ら本物のプロで本物の大人で、それに正しく人間だ。

こんな馬鹿げた事件でバケモノを守るために失われていい人達じゃない。

相棒も相当に腹に据えかねている様子だし、ここらである程度発散させておかないとかえって危険か。

「フレア、何とか言ってみてやれ」

相棒は小さく頷く。殺意の嵐に臆することなく一歩進み出ると、小さな体躯から放たれたとは思えぬ裂帛の気合いを叩き付けた。

「失敬な！ こいつの女違うから！」

いやいやいやいや、そこを力説するシーンじゃないから。

が、本来なら返ってくるはずの嘲笑はない。

辺り一面を包むように瘴気が吹き上がる。物理的な圧迫感さえ感じさせるほどの濃密さだ。

暴徒と化した学生達はおも威圧の声を上げようとすると、声が出せない。足踏みは既に止まっている。

「今の今まで私が何者であるかも気づかなかった、甘やかされた怖いもの知らずのガキんちども。うぬぼれもいじ加減になさい」

本性を剥き出しにしたフレアに、暴徒達は震え上がる。その場に座り込むもの、声もなく泣き出すもの、失禁するものもいた。

それはそうだ。威勢だけのド素人が何十人集まったところで、

伝説級の呪剣のプレッシャーをはね除けられるものか。

「安全地帯から悪意をぶつけるしか能の無い下衆どもを相応しい姿の鬼に墮とすぐらいなら、私にだっていつでもできるわ。相棒に殺意を向けたゴミを掃除するのに良心の呵責なんてないから」

相棒の愛が怖い。ヤンデレだけは勘弁な。

「曲がって矯正できない苗木は抜くしかないの。白銀姫がいつまでも調子に乗らせてくれると思ったら大違い。彼女は私なんかよりずっとずっと恐ろしいわ」

先ほどまでの暴徒達は声もなくカクカクと頷くばかり。

「大人しく解散するなら、今日のところは見逃してあげる。これに懲りたら少しは身を慎む事ね」

パンパン、とフレアが手を打つ音を切っ掛けに、学生達は蜘蛛の子を散らすように逃げていった。

やっちゃまってから言うのもどうかと思うが、今のきつとトラウマになったろうな。鬼に変えられて退治されるよりはマシだろうが。

「フレア一人を悪者にしまったな」

いかにファンタジーな世界とは言え、この学校にも居づらくならそうだな。

「ふん、いっそ本当に殺っちゃっても良かったんだけど。正当防衛成立するし」

偽悪的にそんな事を言うが、この少女がそこまで無神経ではない事はよく知っている。繊細すぎるからこそ、ガス抜きが必要なのだ。

「我慢してくれたおかげで無事に済んだ。ありがとうな」

「ななな馴れ馴れしく撫でるな、この無神経男！」

何度も言うが、頭の高さがちょうどいいので、つい手が出るのだ。

ざかざかっ。がしやがしやん。

突然の金属音に辺りを見回すと、ぎょっとさせられるような光景が視界に飛び込んでくる。クライセンシュタイン卿をはじめとした騎士達が膝をついて臣下の礼をとっている。

予想の斜め上過ぎる展開。何故に？

「勇者ダイナス殿、ご助力恐れ入ります」

「我ら一同、感服いたしました」

堅い、堅苦しい！

そもそも何にそんなに感激しているのか分からない！

「いやいやいや、どうしたんすかいきなり」

さっきの教官先生の態度からすると、ここでは勇者なんて言われても名譽称号みたいなものだろう。本物のスペシャリスト集団に頭下げられるような立場とは思えない。

何にもしてない時に過大すぎる評価を受けても、むず痒いを通り越して気持ち悪いだけなのだが。褒め殺しか位打ちか。大輔などハメでも大したメリットはなさそうなものだが。

「八黒剣の女神の石柱に認められし勇者に相応の礼を尽くしております」

「べべ別にこんな奴なんて全然認めてないんだからね！」

はいはいはい、テンプレ台詞乙。そんなのは別に認めてもらわなくても構わないが、とりあえず女神の方を否定しておけと言いたい。

神様ってのは詩紀様や会長みたいに毅然超然とするもんだ。頭撫でられたぐらいで照れてるようじゃ俗っぽすぎる。

「それなら俺じゃなくてフレアを褒めてやってくださいよ。実際に連中を追っ払ったのはこいつなんですから」

「いえ、本物のクロヒメと直接言葉を交わすなど、そのような畏れ多い真似は致しかねます」

この人、ほんと堅い。人間関係をきっちり定義して、決めた枠から外れないような態度を崩さない。個人的感情が仕事に影響しないように徹底するプロらしい態度って事なんだろうが。

フレアはただ素直じゃないだけで本気で偉ぶるタイプじゃないから、素直に賞賛されればツンテレて張り切ると思うんだがなあ。

こういう生真面目さはいかにも黒男さんの部下って感じだが、あの人の場合は無闇に堅いだけではなくて諧謔を解する余裕も十分に持ち合わせている。そこら辺はやっぱり年の功なのだろうか。

「そうそう、それで思い出した。一度黒男さん、いえコレのお父上にお目に掛かりたいんですよ。そちらでセッティングしていただませんか」

「ジャック・サルトル卿にですか？ それは構いませんが、別に自分の紹介など……」

クライセンシュタイン卿は言葉を濁し、あくまでも控えめにフレアの様子をちらりと見やる。

「バ……父に会って、どどどーゆうつもりよ！ はっきり言いなさいよ！ いや言わなくていい、言わなくていいから！」

赤くなるなつての。そういう受け取り方されると困るから、あえて部下の人経由なんだ。

もう少し深くこの世界の現状を把握するには、彼にアプローチするのが最も手っ取り早かるう。

大輔の実家の連中ときたら、十家に連なる者としての根拠的な

いプライドばかり高く、実際には斗流中枢の情報には全く疎かった。こちらの世界においても似たようなものだろう（それ以前になるべく関わり合いになりたくない）。

そういつた訳で、暎蓮の父親である芳村黒男^{あきむらこくお}さんは、大輔の最も身近な「ちゃんとした大人」にして、斗流内部に詳しい事情通の一人だった。うまくすれば、彼の妻にしてフレアの次に身近なクロヒメである玲音^{れいおん}さんの見解も聞けるかもしれない。

まず気になるのは、騎士団の動きがあまりにも適切すぎる点だ。オーガヘッドの連中は思い込みで暴走するばかりだったが、彼らの言うことにもまるで理が無いわけではない。介入のタイミングや手際の良さは別にしても、本日この場で鬼化が起こることは完全に予測済みであったという事になる。そこあたりはどういう絡繰りなのかはぜひ尋ねておきたい。櫛のチームリーダーである石丸さんが教導騎士団を現場で指揮しているのなら、彼の上司である黒男さんはこちらの世界でも団長に相当する立場にあるはずだろうから。

そこまで考えたところで、周囲の不思議なざわつきに違和感を覚えた。

「勇者殿があのブラックジャック殿に何の御用だろう？」

「きつと我々ごときには与り知らぬ深遠なお考えがあるのだ」

妙な風に深読みされているようだが、どうにも引っかかる。あの、あのって言ったよな？

問い詰めるが、誰も口を割らない。彼の話題は何らかの禁忌とも言わんばかりだ。

「ご自身で直接お会いになられれば分かることです」
クライセンシュタイン卿までこの歯切れの悪さ。

「なあフレア」

「……あんなトラブルの直後にいきなり親に挨拶だなんて、どういう思考回路してんのよごによごによごによ……まさか命の危険に人生を見つめ直して一大決心とかぶつぶつぶつぶ……だいた何であんなパパなんか……」

娘さんは俯いてポソポソとつぶやくばかり。ダメだぜんぜん聞いてない。

「あんなパパ」ってのはどういう意味だ？

向こうでは大物の割に飾らず話しやすい人達だと感じていたが、こちらの黒男さんや玲音さんは違うのだろうか。緊張してきたぞ。うーん、いっそさおりさんの方にアプローチした方がよかったか？ でもあの人ある意味で詩紀様なみに怖いから、できるだけ後に回したいんだよな。

その後も少し悩みはしたが、結局は当初の予定通りに動くことにした。娘のフレアの案内のもと、クライセンシュタイン卿の紹介状を携え、とある屋敷を訪れたのだ。

そして、わかりやすく後悔した。

「ああ……君か。今日はよく来てくれたね」

向こうはこちらを知っていてもこちらは向こうをよく知らない。大輔にとっては良くあることだが、

北斗の血脈につらなる貴族、ジャック・サルトル伯爵。すなわちこちらの世界の芳村黒男氏の変貌っぷりは予想のだいぶ斜め上を行っていた。

「お茶でも飲むかい？ それとも御菓子がいいかな。もらい物で

悪いが」

ずば抜けた長身こそ健在だが、常に周囲を圧倒していた堂々たる体軀は見る影さえない。

いかにも睡蓮の親らしい艶やかな黒髪は、弱々しい白髪と同色の無精ヒゲに。

何より、あの眼光の鋭さは完全に失せ、五十を前にして既に好々爺の行まい。

枯れきっていた。既に真っ白に燃え尽きていた。

「黒男さんつうか白男さんじゃないか」

「ん、何だね？」

「いやこっちの話っす」

サルトル伯は確かに教導騎士団の元団長であったが、今の彼は既に実権を手放した隠居の身であった。

一体何事があったのかと思いきや、それほど複雑な事情ではない。

こちらの世界のお志摩さん、シモーネ・サルトル伯爵夫人が亡くなってからの彼はずっとこんな感じ、だという。

何かがあったわけではない。むしろ無かったのだ。

今の彼の傍らには玲韻さんがいない。それだけで人はここまで変わるものか。

「今更何を驚いてるのよ」

「わるい、今朝相当ずれたばかりでこっちの事情はさっぱりなんだよ」

「……つくづく手の掛かる男よね」

「すまん。毎度毎度ご迷惑をお掛けしています」

でもね、ドリフトくんのは別に俺のせいじゃないんだよ？ 世

界のずれについていけないだけで。

ならば次に会うべきは、現在の教導騎士団長であるこちらの玲韻さん、レイン・カトロアさんだろう。

抜け殻のサルトル伯に暇乞いをして騎士団本部に向かう途上、大輔は自分の知る二人の姿を相棒に語った。

「はあ？ あのレイン姉さんがパ……親父の奥さん？何それ、馬鹿げてる」

フレアはそう一蹴するが、

「俺の知ってる世界ではそうだった。こっちの方がずっと不自然に感じる」

大輔にとっては二人は常にベアだ。亡くなったお志摩さんも含めて三位一体と言ってもいい。

剣の精霊としての属性をクロヒメが安定して力を發揮するためには、剣の振るい手としての相棒を必要とする模様。ならば、玲韻さんの方にも黒男さんを得なかつたゆえの問題が起こっている可能性がある。

そして、果たして予想通りだった。

団長室に通された大輔達を迎えたレインさんは開口一番、「あら、可愛いお客様というから誰かと思えば、シモーネ先生のところのMEMUちゃん」

とか宣った。

「とにかく座って、座って。お茶飲む？ それとも甘いものの方がよかった？」

すごい勢いで迫られて餌付けされそうになってるぞ。

「い、椅子とかお茶とか別に要らないんで、とにかくその名前で呼ぶのやめてください」

「ムねえ。あちらの睡蓮がカタミちゃん、とか呼ばれるのと同じようなものだろうか。」

「私にとっては妹みたいなものだもの。幾つになっても小さなメムちゃんよ」

「ちっちゃくて悪うございましたね。どうせレイン姉とはだいぶ違いますよ」

確かに、フレアはいろんな意味でちっちゃい。

「何よその目は」

「いや何にも」

彼女が小さいというのは単なる事実すぎない。そこに何らかの悪意を見いだしてしまったのであれば、フレア自身の内的な要因が関わっているに違いないのだ。うぶぶぶぶ。

「笑うな！」

やべ。顔に出てたか。

「ふふふ」

レインさんがつられて笑う。だが、本来の彼女の笑顔を知る大輔にとっては幾分硬い表情に見える。

大輔の知る玲韻さんは華麗さとともに女性的な柔らかな雰囲気気を併せ持っていたものだが、こちらの玲韻さんからはまず凄みのようなものを感じさせられる。

こうして妹分を相手に相好を崩していてなお、存在感で辺りを圧倒している。

もともとのずば抜けた長身に加えて、騎士団長としての豪華で威圧的な装い（黒衣の女騎士！）の影響もあるだろうが、それだ

けではない。

波打つ長髪の色はクロヒメ本来のそれではない。脈打つ赤い光を放ちつつ、燃え上がる炎のごとく揺らめき、彼女が世界を滅ぼす炎の魔剣のクロヒメである事実を否認なしに感じさせる。

これは決して歓迎できる状態ではない。

大輔の記憶にある玲韻さんの姿と比べると、身につけた錠前の数が異様に多いのが気にかかる。希代の呪具制作者であったお志摩さん（シモーネさんか）の残した封印の錠をざっと見て二十以上は身につけている。本来は捕らえた術士を拘束するために作られた呪具であり、並みの術士であればこれ一つで満足に呪術が使えなくなるものなのだが……

それにもかかわらず、魔剣としての力が絶賛ダダ漏れ中。破壊した物体を糧にして自己増殖する終末の炎の危険性は、宮藤の双子の宿す星鬼『北落師門』の炎にも匹敵する。それを見越して施されているはずの封印だが、素人目にもまるで足りていない様子。サルトル伯が不完全であるように、レインさんもまた不完全なのだ。

彼女の魂の中に棲む荒ぶる炎の獣は、迂闊に手綱を緩めれば守るべき国さえ滅ぼしかねない。おそらくは常に相当な緊張を強いられているに違いない。彼女のまとう迫力は余裕のなさや表裏一体のものだろう。

対するフレアはかつては「茨の園」の暴走にだいぶ難儀させられたそうだが（具体的に何がいったのかは聞きたくもなければ思い出したくもない）、大輔の知る限りは現在にはまったく安定しており、封印の錠前五つ分の呪に相当するチャーカーも念のための「保険」でしかないようだ。これはクロヒメにとっての適切な「相

棒」の存在の重要性を物語っている。

レインさんの不調の原因は今更言うまでも無いし、何とかすべきたらう。が、余計な動揺を与える前にここに来た目的を果たしておく事にする。

というわけで、ストリートに質問をぶつけてみた。

「常時の騎士団の動きは基本的には各グループに任せているけど、時々『勅命』が降りてくるわ」

ふむふむ。

「今回もそのケースね。アウリーナ陛下やアルジェンティーナ陛下の目はあらゆるところに届いているから。今回はアウリーナ陛下が自ら直接騎士団を動かして対処されたの」

わざと敵対者を鬼に変えている、というオーガヘッド説の真偽はともかくとして、少なくとも周囲への被害を許容して放置しているというわけではなさそうだ。

「こういうことは度々あるのですか？」

「決して少なくはないわ。そうでもなければこの数の教導騎士で鬼化の被害を抑えることは難しいし。どこへでも急行できるようにチームを分散配備して、ぎりぎり対応できているというのが正しいところ」

分単位でしか対応できない地震予知でも電車を止めるぐらいはできる、って感じか。

しかしそれを有効に行うためには実働部隊の常時待機と同時にリアルタイムな情報収集が必須だろう。

要するに、密偵やら千里眼やらによって一挙手一投足が監視されてまくってる可能性があるわけだ。この世界の会長は吸血女帝らしいから、手下のコウモリとか吸血鬼とかを国中に放ってるの

だろうか。

もしかすると（しなくても）、この会話もダダ漏れかもしれない。別に反乱を企てるわけじゃ無いが、あまり気持ちよくない話だ。「堕鬼に見舞われる人物像に何らかの特徴は？」

さすがにこの人もただ者ではない。大輔が暗に匂わせた意味をすぐに理解してくれた。

「道徳法違反で検挙された者に関しては異常な高率なのは間違いないけど、それだけでも言えない。実際のところ、十聖家内でも教団内においても、少なからぬ人数がノーマークで鬼になってるし。中には聖人のように扱われていた人物もいる」

「ほう」

結構重要機密っぽいな。そんなこと一般に知れたらさぞ具合悪からうに。まあ、信頼されていると捉えておくか。

「面識のあった人物に限って、あくまでも私の直感だけで言わせてもらうなら、より一般的な意味で『好ましがらざる』人格の人物が多いという印象はあるわね。余裕に乏しく、嫉妬深くて、容易く激昂し、独善的で寛容性に欠けるくせに、人前ではそれをおくびにも出さない。そういうタイプ」

「あー、ヘプタヴァーダのじじい共とかね」

顔見知りの故人に対してここまでぼろくそに言ってしまうのだから、一見優しげに見えてもなかなか容赦ない人である。そしてフレアはぶっちゃけすぎだ。

だが言ってる内容については納得がいく。サイラスⅡカドノフ君なんてまさにその典型だからな。

結果として反政府・反教団的な性格の組織の重要人物達が、バタバタと鬼に堕ちてしまうというわけか。ついでに古狸や偽善者あ

たりも、あまり調子に乗ると危ういと。

しかし、実際のところどうなんだろうね。

「そもそも道徳法運用の基準とかどんな具合ですかね？ あれって抽象的すぎて判断難しくありませんか？」

質問は苦笑で返された。

「『教導騎士としての感覚を信じるのです』って言われたわ」

あなたがそうだと思おう人が不道徳者です。ただし、本人の同意をえられるとは限りません。ってか。

無茶苦茶のように聞こえるが、そもそも鬼に墮ちやすい人物の傾向についても、大まかな傾向しか分かっていないのだろう。

片端から検挙すると牢屋が小人物で溢れかえり国が成り立たなくなる。かといってあまり野放しにすると予想外のところで鬼が発生しては国民を害する率が上がる。

何とも言えない人物についてはギリギリまで密偵の監視下におき、決定的な言動かなと感じたところで捕縛（間に合わねば緊急征伐）してるわけか。

これ、国民を守るための苦肉の策って感じがするな。

決定的ではないにせよ、何かのヒントがつかめた気はする。ここまで来た甲斐はあった。

お礼、というわけではないが、少しお節介を焼いておくことにする。

「なるほど、大変参考になりました。ときに、話は変わりますが」

「はい？」

「俺についてる鬼の事は存じですまね？」

「『司書神』？」

「ライブラリアンコード。世界の変動を無視して記憶を保持するってい

う」

こっちではそんな名前と呼ばれてるのか。

記憶が妄想か現実かの区別もつかない不便な力だけだな。どっちが好ましいかぐらいは勝手に決めさせてもらおうとする。

「その記憶を元に言わせていただくと、貴女はさっさとサルトル卿とくっつくべきです」

「っ!？」

レインさんの髪に宿る赤い光の脈動が乱れ、パチパチと爆ぜる音とともに幾分か火の粉が立つ。

「深呼吸深呼吸。落ち着いて落ち着いて」

彼女が瞑目して深呼吸を繰り返すのに従い火の粉は姿を消し、脈動の安定性が回復していく。

危ない危ない。危うく建物ごと焼き殺されるところだった。

「……失礼、取り乱しました」

ちょっと動揺しすぎだろうとは思うが、今の彼女は大輔の想像以上に不安定なのかもしれない。

「冗談きついわ。幾つ違うと思ってるの」

と笑い飛ばそうとしてはいるが、顔が赤いよ、レインさん。確かに年齢差は親子ぐらいあるが、同年代の男性では彼女には全く釣り合わないだろう。

向こうでの二人の様子を知っているからかもしれないが、レインさんには人生経験のある紳士こそが相応しいと思える。ぶっちゃけ黒男さん以外の傍らに立つ光景は想像できない。

そもそも、長身で素晴らしく足の長い彼女と並んで見劣りしない男はそうそういない。篤史さんぐらいの身長でも、バランス的

にはぎりぎりだろう。その点、黒男さんならピッタリだ。

「俺の知ってる二人は大変お似合いでしたが」

「……っ！」

レインさん、照れまくりだ。脈ありありじゃないか。

さらに押す。押す。

「人の縁ってのはただの偶然じゃありません。決して軽んじるべきじゃない」

これは若造なりの人生経験から得た信念だ。

こちらのダイナスとフレアはどうか知らないが、大輔と睡蓮の出会い是不自然なまでに出来すぎた偶然だった。大輔の知る限りでは、他のクロヒメ達についても概ね似たようなものだ。

相棒に相応しい人間というのは、大抵は彼女たちの身近に居るものらしい。クロヒメ自身がドリフトを起こして相棒を呼び込むのか、相棒の傍に彼女たちが出現するのはわからないが、とにかく自然と縁が生じるものようだ。

「でも相棒と配偶者は別物よ。それに、こっただけの都合で決められるものじゃないし」

否定しているようで認めまくっている。可愛い人だなあ。

「貴女になびかない男なんてそうは居ないでしょうに」

「ダイナス、おまえもかっ！ 結局おっきいのがいいのか！」

むむ、レインさんではなくフレアの方のスイッチが入ってしまった。

「目つきの悪いデコちびなんか眼中無しかっ！」

言いがかりとしか思えない台詞を吐き、嫉の悪い黒チワワのごとく小さな牙をむく。

「目つき悪いのは、ちっこいせに俯いて上目遣いで見るからだ」
飾らない自分に対する人目を恐れるというのは彼女の彼女らし

い一面だが、一方でこうして自虐的な毒を吐いたり、先ほどのような偽悪的な啖呵を切ったりもする。

さおりさんあたりに言わせると、基本的な自己評価が低すぎるとか何とか。人前ではお嬢を演じている事が多い睡蓮と比べてこちらのフレアはわりと素を見せるから、その分より極端に出てる感じだな。

ちなみに、デコなのは目が大きすぎてすぐ前髪が目に入るから。実用的見地から十分短くしておく必要があるわけ。

「こっこここんなんと並んで顔上げられるかー！ 引き立て役とかゴメンだし！」

順当にパーサー中のフレアに「こんなん」呼ばわりされたレインさんが苦笑する。

「ごめんね、こんなので」

「うがーっ、嫌味かっ！」

フレアの卑屈な発言とは裏腹の評価だが、二人は鼻屑目なしに見て「美人姉妹」だ。そもそもクロヒメ達の顔立ちは姉妹と言っているくらいに似通っている。

それでも総合的なアピール度に差があるのは事実。小柄なフレアをフランス人形に例えるなら、レインさんは生きたマネキンと言った具合。彼女ぐらいの身長があればどんな衣装でも映えるし、町ですれ違えば十人が十人も振り返るだろう。性別も性的嗜好も関係なく憧れの対象となりうるタイプだ。

言っちゃなんだが、フレアの場合は妙な嗜好の連中に好かれそうではあるな。本人的には笑いごっちゃないだろうが。

そこいらへん、どうしても抑えきれないコンプレックスがあるのだろう。そして時々こうやって噴火すると。

「その容姿で他人を羨むなよ。何の不満があるってんだ。しまいにや刺されるぞ」

「ダイナスにはわかんないわよ！」

「まあ分からんね。見ろ、俺の顔なんて平々凡々だ。それでも全然困ってないし、現におまえさんになんて嫌われてない」

いやむしろ、七夏ななつさんとか建流たけりゅうみたいな美人さんでなくて良かったと心底思う。さらに妙な嗜好の連中に好かれそうだし、負け惜しみとかじゃなしに全然うらやましくない。

篤史さんや丈司さんみたいなハンサムならそりゃあウエルカムだけど、現にそうならないのだから別に必要ないのだ。うちの相棒はクロヒメなのだから、彼女的に駄目ならとつくにドリフトでリテイクを食らっている。

ならば、それはフレア自身についても同じ事ではないか。彼女の魂によって選択・最適化された「自分のあるべき姿」が、現状だとは言えないだろうか。

「そうだな。フレアはそれでいいんだよ。うん、全く問題ない」
「勝手に納得するなー！ 納得するなってーの！ つうか卑怯よぶつぶつぶつぶつ」

なおもブツブツと納得いかない様子ではあったものの。誠心誠意の説得の甲斐あったか、フレアの機嫌は普通に会話できるまでに回復してくれた。まったく女の子は難しい。クロヒメなんて得体の知れない女の子ならなおのことか。

相棒の急なバーサークで話題がだいぶ逸れてしまったが、レインさんの焚きつけに戻ろう。

クロヒメは幸せでなくてはならない、と大輔に言ったのは玲韻

さん自身だったはずだ。

彼女自身とサルトル卿、さらに卿の娘のフレアをも幸せにする一石三鳥の絶対妙手。結果が分かっているなら強く勧めるしかあるまい。

「レインさんも自信もってください。ぐいぐい押せばそれでOK！ 絶対食いつきますつて」

美人でスタイルが良くて頭が切れて腕が立って人当たりが柔らかい、それで名門のお嬢様ともなれば、モテないはずがない。あまりにも高嶺の花すぎて男の方から声を掛けるには躊躇があっても、彼女の方から声を掛けられたら普通は一発で舞い上がる。

それでも不釣り合いさに萎縮されて逃げられる可能性はあるが、あのお志摩さんの旦那が務まった胆力の持ち主の黒男さんには当てはまらないだろう。

サルトル 芳村は元々は四三カトリックの分家だ。その当主が一族筆頭家のお嬢の申し出をそうそう断れるとは思えない。

「いいですか、ここはとにかく押せ押せです！」
「こやかなサムズアップでけしあける。」

「うーん、立場を利用して強制するようなのは違うと思うのよ……」

気があるのを否定するのは諦めた模様だが、でも黒男さんの方からプロポーズして欲しいと。

やっぱり可愛い人だなあ。
「それに、MEMOちゃんに悪いし」

「べつに全然悪くないわよ」

気後れたような表情で様子をうかがうレインさんに対し、フレアはけろりとしたものだ。さっきまで大輔に絡んできたのは一

体何なのかと。

「パ……うちの父親に近づいてくる女は今までも何人もいたし、その都度全力で妨害してきたけど」

「してきたんかい」

何をやったかは聞かないことにしておこう。

「あのダメ親父のどこがいいのか全然分からないもの。絶対何か企んでるに決まってるじゃない」

ひどい娘だなおい。

「でもレイン姉さんなら、昔からうちのパ……親父のあと追っかけてたもんね」

「べ、別にジャックさんを追いかけてたってわけじゃないのよ。

シモーネ先生の旦那さんなんだから、一緒に居てもおかしくないでしょ」

真っ赤になりつつ、こういうことを言う。この人意外と往生際が悪い。

「なら、そういうことにしておいてあげる」

フレアはフレアでだいぶ調子に乗っている。年齢でも家柄でも実力でも格上の人相手に、なんでこんなに偉そうになれるのだろう。身内と見なした相手にはとことん強気だ。

「でも、あの人も娘の私よりよっぽどレイン姉さんの方を気に掛けているんだから、分は悪くないんじゃないかな。レイン姉さんで無理なら、他の誰でも更生させられない気がする」

この発言には幾分かの皮肉は含まれているが、半分以上は本音ってところか。レインさんへのコンプレックスを完全に吹っ切ったわけではないが、信頼感がそれを上回っているのだろう。

「メモちゃん……」

感動してるところに、だめ押し。

「サルトル伯を見捨てないでいただけませんか。あの方の才覚はこの国には不可欠です。貴女と共に居ないサルトル伯はとも見られない」

レインさんはしばし瞑目していたが、

「……わかったわ」

目を見開いた彼女の面持ちは、決闘に望む騎士のそれだった。結果を知っている大輔からすれば、彼女ほどの戦士に勇気を振り絞らせるだけの難事とは思えないのだが、本人的には一世一代の賭けなのだから無理もないか。

レインさんの覚悟を見て取ったフレアは、スカートのポケットからホタテ貝の形のコンパクトを取り出して開くと、鏡に向かって話し始めた。

「あーパパ？ 今からレイン姉さんがそっち行くから、絶対に失礼の無いようにしてよ。はあ？ 無駄飯喰らってないで働けて。詳しくは本人に聞いて」

さつきレインさんのアポとるのにも使ってたが、携帯電話に相当する通信デバイスのようなのだ。キャリアとか回線使用料とかその辺がどうなっているのかは分からないが、不特定の相手と連絡が取れるところを見ると何らかのオープンなインフラが存在するのだろうな。リアルタイム監視とか騎士団の緊急展開なんてのもこのへんあってだろう。

それにしても煮え切らない説明ではあるが、せっかく本人が覚悟を決めたところで、ここでフレアからぶっちゃけるわけにもいかないか。

「ちゃんとヒゲ剃ってパリッとした服着て、いいお茶とお茶菓子

準備して……あと、要請を断ったら親子の縁切るから」

フレアはまくし立てるように一息でそこまで言うと、返事を確認せずにコンパクトを閉じてしまった。容赦ないなあ。

「援護射撃ありがとう、恩に着的わ」

「べつに、姉さんのためにやったわけじゃないし。自分のためよ」

札を言われたフレアの方も、これでまんざらでもなさそうだが、なんだかんだ言って、彼女もこのお姉さんが大好きなのだ。

「……それにしても、『無駄飯喰らってないで働け』ってのはひどくないか？」

「それでもまるで嘘ってわけでもないのだけれどね。仕事の方でもジャックさんに手を貸していただけるのなら、願ったりではあるのよ」

「お忙しいんですか？」

「なかなか全面的に任せられる人がいなくて」

大人っぽい見た目によらず若い方だが、名目上とはいえ十聖家の第四位の当主の立場にあるわけで、騎士団長まで兼任しては、形式的な仕事に追われていても不思議はない。

大輔達相手の非公式の会見にはそぐわぬ煌びやかな正装も、騎士団本部での会見も多い故なのかもしれない。

そんな人間を当日にプロポーズに引っ張り出してしまつて良かったんだろうかと思わなくもないが、うまくいけば公私ともに支えてくれるパートナーが得られるわけなので、関係者の皆様にはご容赦いただきたいところ。

「本当なら、こんな時にサオリさんが居てくれればと思うんだけど」

「なんですと？」

一瞬、何を言われたのか分からなかった。聞き返してしまった。サオリってのは、あの、さおりさんだよな？

「さおりさんがどうしたと？ そこんとこ k w s k」

なんと！ 玲韻さんと同じくお志摩さんの弟子にして丈司さんの師、斗流の影の支配者と噂されるあの「ハートの女王」が不在だという。

「次こそはあの人に聞き込みにいこうと思っていたのに、ああ残念だ。残念でしかたない！」

「そういう割にはちっとも残念そうじゃないけど」

怖いんだよあの人。

小柄なお姉さんだったが、玲韻さんと並んでもぜんぜん迫力負けしない。こちらの世界で言うアルジェンティーナこと詩紀さんにさえ、姉のように慕われて（恐れられて？）いた人物だ。

北斗の星鬼の一柱を宿しながらも、あえて人に為せる技だけで鬼に対抗する一方で、時に鬼に全面的身体を預ける事さえやってのける。

鬼斬りとしての力量や策謀家としての能力もさることながら、その剛胆さこそが彼女の真骨頂だろう。

なんだかんだ言って斗流若手達の精神的支柱となつていると同時に、重鎮たちには煙たがられている。

まあ、そういうお人だった。だったのだが。

「ベイ国に留学中に魔王復活事件に巻き込まれて、ご学友のアリスさん達とともに取捨のため奔走。その後も、政情の安定のため尽力されているとか」

らしい。あの人らしすぎる。

「あの国が揺らげば全世界の安定に影響するしね。不幸中の幸

「いつてやつじゃない？」

フレアの言葉に、レインさんは我が意を得たりと頷くが、「でも、私ではあの人の代わりには十分には務まらないわ。だから、ジャックさんにはなるべく早く元氣を取り戻して、近くで相談に乗って欲しい」

その口調には深刻さがある。個人的感情のための単なる口実ではない、ってわけだ。

「サオリさんとは魔法で連絡とかとれないんですか？」

例の魔法のコンパクトとかで一発解決！ とはいかないものか。

「ベイ国は魔界封印の安定を保つための魔術的鎖国下にあるから船便での手紙ぐらいしか方法が無いの」

「デスヨネー」

大輔に思いつく程度の手段はとつくに考慮してますね。はい、ごめんなさい。

しかし冗談で無く困った。さおりさんが苦手なのは確かだが、いざとなれば斗流随一の事情通であり本当の意味での実力者でもある彼女に頼ればいい、という甘えがあったのは確かだ。

いつものように皆を煙に巻きながらも、機械仕掛けの神よろしく、ぼっさりと問題を解決してくれるのを期待しまくっていたのだが。

「……攻略本もなしの実力勝負かよ」

こいつは厳しくなってきた。

「あ、あたしがいるじゃない」

「心配無用。フレアの方は織り込み済みだ」

「べつに心配なんてしてないし、そんなアテにされても困るって言うか」

こいつは少々のチートでどうこうできる難易度じゃなさそうなんだよな。

いやいや、さおりさんに何を頼らって何をやらうって？

自問する。

しれたこと。この「狂った」世界を修正するのだ。

今現在認知している世界が夢ならば、目覚めれば元に戻る。だが、それが大きなドリフトの結果であるならば、何とかして修正せねばならない。この世界でおそらくただ一人、その道標となる情報を持つ大輔にはその責任がある。

……ってのはごまかしだな。「狂い」の定義には、前提としての「正しさ」が存在する。

わずか二年かそこらの経験ではあるが、今朝までの世界こそが、大輔にとつての「正しい」世界だ。ファンタジー的な世界観への移行についてはまあ許容できるとしても、鬼化の異常多発についてはなんとか矯正すべきだ。

その根拠といえ、あの世界を大切に感じる気持ちだけ。要するに大輔のワガママでしかない。

それがどうした、文句があるか。自分の優先するものを守れないなら、普遍的な正義などくそ食らえた。

さおりさんの知識と手腕が当てにならないというのは大問題だが、諦めるわけにもいかない。正直、ここは大輔にとって居心地がいいとは言えない。たとえ歓迎しかねる人格の持ち主達であっても、同級生が次々鬼に堕ちるような世界は願ひ下げだ。

平行世界を感じする能力を備えていても、別に神様ってわけじゃない。持てるものの責任なんて考えるのは思ひ上がりだし、そんな事まで考えていてはヒトの心は到底保たない。

人並み外れた力を持つという事実は事実として認めつつも、自分がただのヒトであるという実感を失わないことだ。無理をして聖人君子であろうとしなければ、生きていくのはぐっと楽になるし、むしろ必要なときに能力を躊躇無く発揮できる。これはかつて七夏さんに教わった心構えだ。その境地こそが一個の人間をして詩紀さんをも救わせ、彼女のパートナーたらしめた原動力なのだろう。

ならば、この世界がどうにも気に入らない大輔も、躊躇無く動き続けるとしよう。

最後の若たるさおりさんが居ない状態で大輔ごときに何ができるといえば、せいぜい頭を働かせるぐらいしかない。

無闇に動くのは愚の骨頂。まず行うべきはさらなる現状把握だ。こちらの世界の情報と元の世界の知識を元に、変化の原因や容疑者の可能性を一つずつ潰す。

まずは最も身近な人物、フレアからだ。

暴走時には相当の鬼でも呪い殺した実績のある彼女だけに、人を鬼に墮とす力を備えている可能性が無いとは言えない。だが少なくとも現在のところフレアの状態は安定している。彼女が原因の可能性は限りなく低い。

ではほかのクロヒメはどうか？

大輔が知る限り、他のクロヒメでヒトを何かに変えた実績があるのは鶴居垂氷つるいぐらいだ。大輔自信は直接の面識はないが、さおりさんの見解によるならば、とある宗教団体の中枢に深く隠蔽されたそのクロヒメは、生物の魂に干渉することで過去や未来の知識や姿を引き出せるという。だが、前世や後世の姿に変える事が

できるとはいっても、それは鬼を憑かせるのとは根本的に異なるはずだ。

そう、墮鬼そのものは自然現象だ。単に現在の発生頻度が異常なだけで。

原因はともかく、それが人類にとってどれほどの脅威であるか。大輔とて斗流の端くれ、鬼の危険性は身にしみている。人間に対する攻撃性や戦闘能力を抜きにしても、いつどこから現れるともしれぬ鬼から人々を守り切るのは難事だ。それが多発するという状況は、帝国の安全保障の根幹を揺るがす問題と言える。

であるから、帝国が墮鬼を口実に人民を弾圧しているというオーガヘッドの理屈には無理があると云わざるを得ない。大輔が見る限り、教導騎士団は真剣に彼らを鬼から守ろうとしていた。

オーガヘッド言うところの自由の抑圧も密告の奨励も、人民を守るための手段ではあっても目的とは考えにくい。

言っては何だが、オーガヘッドおよび呼応する組織が全戦力を終結させたところで、帝国や教会には何ほどの脅威にもならないだろう。まとめてレインさんに焼き払われて、かえって帝国の支配力を強めるのがオチだ。本気で帝国に打撃を与えたいのであれば、鬼と同じように散発的にゲリラ戦を仕掛ける方がよほど有効と言えるが、守るべき人々を盾にするような真似をしては民衆の支持など到底得られないだろう。そこで本来の目的まで見失うほどアホな連中ではないと信じたい。

ただ、引かかるところもある。

レインさんの証言からは、詩紀さんが鬼化の異常多発を察知できているのは間違いない。だが彼女の力をもってしても現象を抑制できていないというのは尋常じゃない。

これは今となっては大輔以外の誰も覚えていない出来事だが、どうしても思い出される事件がある。あの時、彼女が「死」を否定した結果として、珠坂の町はゾンビと鬼で溢れかえった。

珠坂市の支配者としての詩紀さんでさえそれだけの力を備えていたというのに、アルジェンティーナはアウリーナとともに帝国全体を統べる、さらに強大な存在だ。この現状を彼女が收拾できないというのなら、彼女自身が望んでいるか、少なくとも是認している可能性をも考慮すべきではないだろうか。

彼女たちに直接目通りして本意を尋ねるのが手取り早いのが、現時点で真意の分からない二人への接触は得策とは言えない。会長が吸血女帝アウリーナなんて代物に変貌している以上、アルジェンティーナについても大輔の知る詩紀さんとは別物となっている可能性がある。何しろ彼女には北斗の星鬼の頭『樞』が憑いているのだ。もしあれが目覚めているようなら、人類全体に対する脅威度は墮鬼多発の比ではない。

だがその説も弱い。樞が活動しているなら、鬼よりも水の魔物の動きが目立つはずだ。そもそもそんな状況を七夏さんが傍観している筈がない。

七夏さん、か。

詩紀さんに最も近い人物の一人である彼なら、何らかの情報を得ている可能性がある。しかも、斗流の中枢に近い人々のうちでは、これまで比較的大輔と縁があった。

「お忙しいところ申し訳ありませんが、最後に一つだけ。アルジェンティーナ殿下の婚約者とお話しさせていたいただきたいんですが」
そういうわけでレインさんにこちらの世界の七夏さんの紹介をお願いすることにした。

した、のだが。

「……婚約者、ですか？」

不思議そうな顔をされた。この世界では違うのか？

ドリフト後や夢の中で細かい人間関係が変化していることは良くあるが、今回は固有名詞が安定していないのが厄介だな。

「ええとですね、俺の一つ年上の男子で、線の細い美人さん。見た目ちょっと緩そうで人当たりの柔らかい」

「なんぞそれ。漫画のキャラクター？」

形容詞が噛み合っていないのは承知の上。だってそうとしか言えない人なんだよ。

だいたいフレアに他人のこと言えるかっての。

つうか、漫画とか存在するのな。

「婚約者でないとしても、おそらく彼女の近くには居ると思うんですが」

「女の子にしか見えない優しい男の子、ですか」

レインさんは戸惑いを隠そうとしない。心当たりがない、というより、心当たりがありすぎて困惑している様子に見える。

「ご存じなんですわね」

「そう……ナナちゃんが」

その名前なら、おそらく間違いないだろう。五ヶ瀬七夏さんは親しい人々（詩紀さん含む）に「ナナ」と呼ばれていたからな。

レインさんの態度がどうも煮え切らないが、彼女は意味も無く言葉を濁す人ではない。急かすことなく、次の言葉を待つ。

「ダイナスの知っている二人は、仲良しだったの？」

「そ、そりゃあもう」

あんなに傍迷惑なカップルはそうそういないが、ものすごく仲

良かったのは間違いない。

「そっか。なら、アージェがああなったのは……」

「うん、たぶん」

レインさんとフレアは顔を見合わせてうなずき合う。

二人だけで納得されてしまった。

「コレにはあたしから説明しておくわ。だからレイン姉はさっさとパバんとこ行っちゃって。善は急げ、っていうかあれ以上手遅れになる前に」

「わかった。ここはお願ひするわ」

それだけ言い残すが早いか、レインさんは姿を消した。二階の窓から飛び降り、近接戦闘用の縮地法まで使ったの全力疾走だ。階段を使うのも馬を引くのさえもどかさなかったのだろう。

何だかんだ言って黒男さんの事が気にかかってたんだらうな。

呼び止めて悪い事したかも。

それはともかく。

「なあ、フレアもナナさんのこと知ってるのか？」

ここで躊躇するなど、大輔に対しては対しては直言を旨とするフレアらしくない。

「知ってるって言えば知ってるけど……アンタ、知らないのよね？」

とってつけたような皮肉もツン成分も抜きの真面目一〇〇%の表情に、嫌な予感がふくれあがる。聞きたくない。

いや、ならばこそ聞かねばならない。それがどんな不都合な真実であっても、知る必要がある。

「言った方がいいのか分からないけど、驚かないで聞きなさいよ」
頷き、視線で発言を促した。

「ナナって男の子は、8年前に災害で亡くなってる。ヘプタヴァーダのリンリン・ペンペンの双子や、そのほか大勢の人達といっしょに」

「は？」

なん……だと？

うちの相棒が何を言っているのか全然わからない件について。

「悪い、よく聞こえなかった。もう一度頼む」

「その人は故人。もう死んでる。この世にいない。理解したらシヤキツとなさい、ダイナス」

大輔の理解が悪いことを察したか、いろいろな表現でもって畳み掛けてくる。さすが相棒、よく分かっている。

だが、脳が状況を理解できても、心が理解を拒否する。

それはそうだ。サオリさんの留守どころの衝撃ではない。キーパーソン中のキーパーソンが既に帰らぬ人だなどと、認められるか。

やばい。やばい。やばい。

七夏さん抜きで野放しの詩紀さんの危険度、一体どれほどのものだろうか。想像したくもない。恐ろしすぎる。

「良く崩壊してないこの世界」

いや、そうでもないか。

「レインさんたちが頑張ってくれてるからじゃないの」

フレアの言うとおりだ。

一見して元の世界以上の秩序は保たれているが、野良猫並みにぼこぼこ鬼が沸く状況が到底まともであるはずがない。

そして、とても健全とは言えないこの世界は、アルジェンティナーの精神状態を反映している可能性が多分にある。大輔自信の不

安を反映した夢にすぎないのかもしれないが、そうだとすると大輔が自己嫌悪に陥る程度で済むから、そっちの可能性についてはひとまず忘れる。

こうなると今後の方針についても修正すべきだな。自分で言うのも何だが、大輔の記憶は世界修復の最後の砦であるから、うかつな危険は冒せない。アルジェンティーナに直接目通りするのはもう少し後回しにすべきだろう。やっぱ怖いしね。ならば。

「こちらサオリさんの従弟の、コーディーさん」

投げやりなフレアの紹介。心底嫌そうな表情を隠そうともしない。

気持ちには分かる。よく分かる。

頼りになりそうな人間を訪ねて、新川^{ユナ}の屋敷までやってきてみれば。藤の長椅子に寝そべり、真っ昼間から出来上がっている青年が一人。こっちの世界のアルコールの年齢制限がどうなってるかの件はともかくとして。

「篤史さん、あんたもか！」

つい口に出して言っちゃまった。

「んあ？ ダイナスかあ？」

こりゃいかん。

男が惚れる男前、往事のイケメンっぷりは何処へやら。

億劫そうに開いた瞳はどんよりと濁り。鍛え抜かれた体軀は見ると影もなく緩みきり。ジャバ・ザ・ハットもかくや(言い過ぎ)の体たらく。

「偉大な勇者様がこの哀れな出洩らしに何の用でございますかねえ？」

うわ、嫌味言われた。

卑屈さなんて類の感情とは無縁と想っていた篤史さんが、大輔なんかを相手にこんな台詞を吐くとは。

カリスマを失って太ったおぼちゃんに成り果てた、かつての大アイドルを見ているような気分。思わず天を仰いでしまう。

これじゃダメ人間のヒキニートを通り越して廃人寸前だ。抜け殻好々爺状態の黒男さんもアレだったが、篤史さんは輪を掛けてひどい。ここに来ると言ったとき、フレアが気乗りしなそうにしていたわけだ。

この人に何があったのか。あれほど完成された人間をここまでダメにするには、一体どれほどの精神的ダメージが必要なのだろうかと思う。

人間が情熱を失う切っ掛けなど、意外と些細な出来事なのかもしれないが。

お志摩さんを失った後に玲韻さんを得なかった。ただそれだけで、黒男さんはああってしまったのだから。

ともあれ、ここは聞くべき事を聞こう。

「コーディーさん、あなたの妹さんの事について、質問があるのですが」

しかし彼は胡散臭そうに首を傾げる。

「俺に妹なんかいないぜ」

そして弱々しく笑い、こう付け加えた。

「むしろ絶賛募集中だ。ツンデレな義理の妹希望」とすると、この世界では詩紀さんは篤史さんの義理の妹には

なっていないという事かな。

しかし、ツンデレって言葉は通じるのかよ。

そもそも日本語が普通に通じてる時点でそんな疑問は無駄なのだ。どうせ夢かもしれないのだし、深くは考えまい。

「そこは幼なじみが基本じゃありませんかね？」

深く考えなかった結果、適当な台詞がこぼれてしまった。

傍らのフレアに無言で足を踏まれる。まずったか？

「そいつは嫌味かよ」

洞穴のようだったコーディーさんの瞳孔に鈍い光が宿る。

左足の甲にはなおもグリグリと踵がねじ込まれてくるが、所詮は軽量級のフレアの仕業だ。こらえられないほどではない。

この話題がメガトン級の核地雷だとしても、引けない。さおりさんも七夏さんもない以上、篤史さんの重要性は極めて高いと判断されるからだ。

一時的とはいえ樞の力の一端さえ操って見せた篤史さんの潜在能力は折り紙付きだ。更生・社会復帰させられれば、教会側の戦力はかなり増強できる。あちこちで発生する多数の鬼に対して対して手が足りていない現状を少しでも改善できる可能性がある。

別の理由もある。

これは大輔にだけしか分らない話だが、彼はスペシャルだ。彼の行動が周囲に与える影響力は非常に大きく、他者の運命への干渉量が半端でない。

大輔の知る世界において、篤史さんのパートナーとなる人物は常に揺らいでいた。基本的には遠野結香さんなのだが、時に長刀部の鹿取さんやら、前生徒会長の赤枝さんやら、天才ギタリストの佐倉さんやらとくっついてたこともある。まれにPCパーツ屋

の美礼ちゃんなんてパターンもあったし（これはだいぶ犯罪くさい）、吉野ちゃんとかいうピンクの髪の不思議な娘を連れていたのも見た。

そこらへん、どうにも奇妙に感じて調査してみた事がある。当該人物達は多かれ少なかれ何らかの問題を抱えていたようだが、必ずしも完全にはないにせよ、それらは篤史さんによって解決されていた。篤史さんによって救われ運命を変えられた人物、というのが彼女たちの共通点だった。

ぶっちゃけると、彼は「ヒーロー」だ。問題を見つけたらくちばしを突っ込まずにはいられない。時に身体を張り命さえ賭け、誰彼構わず有無を言わず救ってしまおうデタラメっぷりで、かつモテモテ。これは漫画やラノベやギャルゲに良く出てくるような出来過ぎの主人公ぐらいにしか為し得ない所行だ。かつての神のごとき勇者ダイナスならともかく、今の篤史のような凡人にはとても真似できない。

そんな彼が引きこもって行動を起こしていなければ、各方面への影響はさぞや大きかろう。

そういう意味ではもう一人ばかり、状況を確認しておくべき人物がいるのだが、そちらは置いておいて。まずはこの人。

ちよつと水に向けてみるか。

「ところでユッカさんは今日はどちらに？」

「おいこら！」

フレアの慌てようからすると、どうやらこの名前で合ってたようだ。

「俺にそれを聞くか」

コーディーさんの低く唸るような声とともに、殺意としか言い

ようなない気配が辺りを満たす。いや、怠惰な空気に覆い隠されていたものが露わになっただけか。

斗流の達人たちの放つような、冷たく鋭く研ぎ澄まされた殺気では無い。

鈍くて猥雑で生ぬるく、どろどろとまとわりついては心身の自由を奪う。地獄の大地とでも形容したくなるような重苦しさと思苦しさ。

妬み嫉み、やり場の無い苛立ち。抑えきれない後ろ向きな感情方向性を持たず、自分自身を含む世界全体に向かうようなそれ。

事態は想像以上に深刻だった。彼はサルトル卿のように落ち込んでいるだけではなく、ダークサイドに堕ちかかっている。

絶望は自暴自棄の種。それはやがて支離滅裂の花をつけ、秩序の崩壊をもたらしかねない。

この人もまた十分危険だ。痩せても枯れても斗流宗家候補。危険性ではアルジェンティーナに大きく劣るものではない。

そういう崖っぷちの人間をむやみに刺激するのは得策では無い。フレアが止めるわけだ。

道徳法の見地からどうかと考えて見たが、大輔の私見では完全にアウト。ちなみにサルトル伯への対応を振り返ってみると、結局は騎士団長自らによる嚴重経過観察を勧めた形になる。なるほど、こんな具合で運用してるのかと勝手に納得。

駄目だこいつ、早く何とかしないと。でもどうやって？

が、理性崩壊寸前と見えたコーディーさんの表情から、急に緊張感が抜けた。

「おっと、責める相手を間違えるところだったぜ。まったくunchайないぜ」

端正な口元をゆがめ、にへらっ、と笑う。

「お見込みの通り、あいつなら天国だ。さあ、好きだけ罵ってくれ」

逆ギレ寸前からDMモードか。切り替えが極端だな。

「ちょっと待ってちょっと待ってコーディーさん。罵るも何も、俺には全然事情が分からないんですよ。ほら、訳あって記憶が怪しいもんで」

先ほどからの彼の態度から、なんとなく見当はつかなくもないが。

「そうですって。こいつ無神経なだけで悪意とか全然無いんで。発言どころか存在自体まるっと無視してもらって結構ですから」

とフレア。フォローにかこつけて好き放題言われてる気がする。さっき忠告を無視した意趣返しか。

「まあ待て、皆まで言わなくていい。忘れたんならかえって好都合だ。何度でも話してやるよ」

コーディーさんはだらしなく身を預けていたソファァから体を起こし、大輔達に真剣に向かい合う体勢になった。

なんでそんなに語りたげなんだ。自己弁護か？

「ユッカもナナもヘタヴァァダの双子も、あそこで死ぬ運命じゃなかった。あの集中豪雨と土石流はまったくの人災だ。クソガキだった俺が、身の程もわきまませず姫巫女に成り代わろうとドゥーベの鬼を喚んだのがすべての原因だよ」

ドゥーベの鬼というのと、斗流のご本尊である樞そのものだ。その招来に伴う事故だとすると、例のダム崩壊事件に相当する出来事なのか。

「でもコーディーさんは彼女たちを救おうとしたんでしょ？」

「失敗してちゃ世話無いさ。結局アージェのやつが暴走するクルルを抑えたばかりか、あれだけ嫌がっていた巫女姫の立場を受け入れちまったんだからな。まさに藪蛇だ」

バレバレな鞆晦はともかくとして、幼少の彼は彼なりにアルジェンティーナ達のために動いたわけだ。結果として失敗したどころか無駄な災厄まで招いたとしても、その心意気の尊さにはかわりなからう。

「あんたはカッコよすぎるんだよお！」

魂の叫びが口をついてしまった（死亡フラグ）。反則だろこういうの。

大輔は篤史さんが斗流宗家の座を巡って詩紀さんの前に立ち塞がったのを知っている。彼は結香さんの鎮魂のためのけじめと言いつ張っていたが、詩紀さんを重責から無理矢理にでも解放しようという一面もあったのだろうな、と今更ながら得心がいく。

「やっぱり、おまえらも俺を罵らないんだな」

コーディーさんの声には失望の調子があった。

「あれだけの人間の命を奪っておきながら、自ら死を選ぶこともできず償いの道に生きることも出来ない俺は、ただの卑怯者だ。それなのにおまえらは俺に同情するのか」

「やらずに後悔するぐらいなら、失敗したら運のせいにする方が健全だと思うけど。それが出来ないのは気の毒かも」

フレアの台詞はコーディーさんを慰めてるのだけでなく、本気でそう考えていそうだな。まあ、前向きなのはいいことだ。傍若無人にならない程度なら。

「俺もさんざん失敗してきた口なんです。何を言ってもブーメランになりそうですよ」

そうでなくても事件に関しては全くの第三者に過ぎない大輔が、彼の落ち度を責め立てるのは筋違いでしかない。

だが、

「お前ら優しすぎるんだよ」

と、コーディーさんはさらに肩を落とす。

「教団十聖家の子弟は世俗の法の縛りを受けないが、より厳しい掟に縛られているはずだろう。だが俺は罪に問われなかった」

「いいか、裁かれて許されたんじゃない。初めから起こらなかった事にされたんだ。アージェは俺の記憶を消そうとさえたよ。何が何でも抵抗したけどな」

「俺が泣いても喚いても暴れても、慰められるかさつと見守られるか。あの洪水は俺が起こしたと訴え出ても、気の毒そうな視線を集めるばかり」

「ついに、大切な友人を失って気が触れた気の毒な少年としてこんな屋敷に軟禁されちゃった」

立場こそだいぶ違え、一族の恥部扱いで軟禁は身に覚えがある。わりと無神経な方だと自負する大輔でも、中二病の馬鹿（こっちは今も否定できない）扱いはともかく、可哀想な人扱いはそれなりに堪えたものだ。

「俺は罪を償って楽になる事も許されないのか。償うことも許されないほど酷いことをしたってのか？ その通りだ、俺はひどく自分勝手なガキだったんだからな。」

「あいつらを救いたかったなんて嘘だ。ただあいつらのヒーローになりたかっただけだ。だから俺には十分に糾弾される資格がある」

訥々と語る彼は、ただひたすらに裁きと罰を求めている。

自分で自分を許せないからこそ他者からの許しが必要なのに、贖罪の機会を削がれてしまった。ゆえに彼の心は事故（あえてそう言おう）の後から一歩も進めていないのだ。

この人にこれほど弱いところがあったんは意外だ。

ダム破壊の原因となった樞招来の失敗が無かったことにされたのは大輔が知る歴史でも同じだが、向こうの篤史さんは最後の最後まで詩紀さんの前に立ち塞がるほどの気概を示したものだ。あの「結香さん」の存在がどれほど大きかったかが分かる。失意の篤史さんへと引き合わせたのはさおりさんだというから、ここでも彼女の不在が実に痛い。

「しかも、どれだけ法を破っても鬼に堕ちることも断罪されることも無いなんてな、ひでえ冗談だ。アージェの奴は兄貴分の俺を守っているつもりかもしれないが、こんなのは呪いでしかない」

それに、とコーディーさんは言う。

「きっとシルヴィーも同じことを言うだろうさ」

知らない名前が出てきた。誰だ、誰に対応するんだ？

「彼女も気が触れたって事にされてるが、あり得ないな。アージェに記憶を奪われたのに違いない。ふざけんな。余計なお世話だ。罪やら借りやらを忘れて生きるのが幸せなもんか」

自分以外の事に話題が及んだ途端、言葉に結構力が入ってきた。だいぶ篤史さんらしくなってきたじゃないか。

とことん主人公体質のこの人には、何かしら守るべき対象が必要なのかもしれないな。

それはさておき、

「盛り上がってるところ申し訳ないんですが。発言して構いませんか？」

挙手。

「何だよ、いい罵倒の文句でも思いついたか？」

「そーじゃありませんが、シルヴィーって誰ですぶばあ？」

小さな裏拳でツツコミが入った。

「そんなの後で私に聞けばいいでしょう！重要な話の腰を折らないでよ！」

「大事そうだからこそ尋ねたんだよ」

鼻の痛みで涙声になってしまい、上手くしゃべれない。

俺には容赦ないツツコミが居てくれる事を否定なしに思い出した。今のコーディーさんのようにならずにすんだのはこの娘の御陰かもしれないが、心も体も痛いものは痛い。

「んな事まで忘れたのか。シルヴィアはアージェの双子の妹だよ」

「妹？」

詩紀さんの妹なんて人物は知らないが……いや、待てよ待てよ。会ったことは無いが、七夏さんからは聞かされたことはあるな。

ええと、確か、実紀さんだったか。

大輔のように固定した視点から見ると、兄弟、とくに一卵性の双子は意外と不安定だ。

エクスカリバーとその鞘のクロヒメである炬絵莉華と紗也は状況に合わせてひっきりなしに一人になったり二人になったりして、莫耶のクロヒメである高天萌衣は寛彰に取り込まれてることも逆に取り込んでることも分離してることもある。七瀬のリンペンペンがあわせて一人ってパターンもたまには見る。

不思議なことに、一卵性であるはずの宮藤のメイドさんズは手袋の長さこそ変動するが、一人というパターンは見つかりが無い。おそらくそのパターンではカタストロフ必至で後の歴史が成立し

ないのだろうと想像している（怖っ！）。

七夏さんによれば、詩紀さんは二つの魂を一つの身体に宿す二連精魂デュアルコアだという。斗流を統べる白銀珠比女命は元来双子の巫女であり、二人一組で樞の力を制御してきたというから、詩紀さんが二人に分かれても不思議はあるまい。

確かに不思議は無い、のだが。大輔が知る限りでは詩紀さんの姿は常に一人だった。彼女達が二人分の身体を持って存在しているというなら、そこには何らかの理由があるに違いない。

それに、シルヴィアさんとやらが「アルジェンティーナに記憶を奪われて罪や借りを忘れた」というのが気にかかる。妹を解放したかわりに一人で姫巫女の責を負ったのなら、アルジェンティーナはただ一人で樞を制御している事になってしまう。

そのやり方は、宮藤さんの例のようにまったく駄目では無いにせよ、決して筋は良くなさそうだ。墮鬼現象の頻発の原因は、あるいはその辺にあるのではないかとさえ思える。

そう、結局彼女なのだ。

世界の変動の核心に迫るには、やはりアルジェンティーナへの目通りから逃げ続けるわけには行かなそうだ。いつまでも続けていても埒があかない。

ここは思い切って暇乞いをするにしよう。こういうのはその気になったときに思いきってやらないと、すぐに決心が揺るいでしまうものだからな。半軟禁状態にさっさと適応して自ら引きこもって精神力の弱さは伊達じゃないぜ（泣）

「コーディーさん、本日はお忙しいところ貴重なお話をありがとうございました」

「まったく嫌みだな。どっからどう見ても暇を持って余してるだろうが」

「そんなにお暇なら、一つクエストを差し上げますよ。故シモーネ・サルトルさんの残したアイテムの調査整理なんていかがですかね。貴方なら教団の隠し宝物庫にも出入りできるのでしょからまさに適任。暇つぶしには最適でしょ」

「あんなあ。使いだのわからない道具ばっかりどれだけあると思ってるんだ。完遂のあかつきには何か賞品とか出るんだろうな？」

「俺自身からは何も。でも今の貴方に一番必要なものが見つかるかもしれないと言えなくも無い気がしたりしなかったりしちゃったりして」

かく言う大輔自身は、多分に希望的観測ながらほぼ確信している。シモーネさん作の「ユッカさん人形」はどこかでコーディーさんを待っているに違いないと。

しかし、いかにも荒唐無稽な話を具体的に説明すればかえって説得力が失われよう。向こうの篤史さんにしてからがつい最近まで誤解していたぐらいだからな。ここはいっそ曖昧にした方が効果的だろう。

「さおり姉みたいに持って回った言い方しやがって。何企んでる？」

大輔にさおりさんのようなフィクサーっぷりを期待されても困るが、ネタを知る立場上このぐらいの誘導は責任のうちだろう。本来ならさおりさんが果たすべき役割を篤史さん自身にやってもらうだけの事だ。

「まあまあ、ここは一つ騙されたと思って俺の顔を立ててくれま

せんかねえ。俺が何者かを考えれば、答えは自ずから明らかでしょ」

なるべく興味をかき立てるべく、精一杯悪徳弁護士っぽい顔を作りながらそう駄目押ししたところ、大きなため息を返されてしまった。

「とことん企み事に向いてないな」

苦笑するコーディーさんの視線を追うと、握り拳で固唾をのむフレアの姿が。応援団かっつての。

「企みの内容は置いておいても、お前さんが真剣なのは彼女を見てれば分かる」

「あゝ」

がっくりだ。せっかくの熱演が台無しじゃないか。

自分ではポーカーフェイスだと思ってるくせに、本音ダダ漏れなんでもんな。

「いいぜ。踊ってやる。立てるのはエルフレアさんの顔だけだな」

「ええ、相棒に感謝しときますよ」

突然二人の視線を集めたフレアは困惑の表情を浮かべる。

大輔もコーディーさんも何も説明せずにただニヤニヤしていたところ、

「な、何？ 何なの〜!?」

意味も分からぬまま、赤面してふくれてしまった。

クールを気取ってはいても、感情的で子供っぽい（しかもちんちくりん）。そこらへんはサルトル伯爵令嬢エルフレアなんて立場に変わっていても変わらないし、完全無欠な無双勇者の相棒としての完璧なフレアよりよほど好ましい。うん、これでこそ平

常運転の睡蓮だ。

黒男さん達にせよ篤史さん達にせよ、すべからず大輔にとっての正常状態になっているべきなのだ。以前より相当劣化したとはいえ、自分だけが勇者待遇で相棒も健在、ほかはみんな不幸なんて世界の夢なんて見てしまっただけは寝覚めが悪い。夢で無ければなお悪い。大輔の力が及ぶ範囲だけでも、なんとか軌道修正できればと切に思う。

目標となる「あるべき世界」のビジョンは既に大輔の中に存在するし、ファミメウルで得た知識は大輔にとって大きな武器になる。

少なくとも黒男さん夫妻は上手くいくだろう。篤史さんについては故お志摩さん次第だが、分の悪い賭では無い。影響の大きなキーパーソン達の現状を改善していくことで、未来については少しずつでも修正できるだろうし、そうした例は他にも数多くあるだろう。

だがそういう意味では、七夏さん抜きで詩紀さんこそ何とかすべき最右翼だろう。鬼化事件との関連性を抜きにしても。

知識を基に助言するという方法では過去の修正は行えない。これが自分の夢であったとしても過去の修正は簡単なことでは無いし、巨大なドリフトの結果とすれば大輔一人の手には余る。詩紀さんこそが一番「なんとかできそう」な人物なのだ。ここで一発大逆転の目を引き当てられれば、あえてコツコツと未来を変える必要も無い。

詩紀さんに会って、わけを話す。何だ、簡単なことじゃないか。

新川の屋敷を辞した後。

門前に立ち尽くす大輔に、フレアが声をかけてきた。

「行くんでしょ？ アルジェンティーナのどこ」

「さすが相棒。よく分かっている」

ここは彼女に会うのが最善手だ。詳細に考えを話したわけでは無いが、フレアは彼の考えを概ね理解してくれているようだ。

「あなたの行動パターンは何となく読める」

「王道の燃える展開になってきたじゃないか。狂ってしまった世界を修正するための孤独な戦いだぜ」

しかもわざわざ大輔の、いやダイナスのホームグラウンドで。やれと言わんばかりだ。

「つまり俺のターン。当番会って理解でOK？」

「はいはい孤独ね。なんか分からないけど、楽しそうで羨ましいわ」

そうだろうそうだろう。

「俺の知識とアルジェンティーナの力をあわせれば、歴史の修正さえ容易いことだ」

あえてギャルのパンティーとか要求してみたいという衝動にさえたえられれば、だが。

「何者の悪意か知らないが、この勇者ダイナスの記憶を消さなかったのが運の尽きだな。はーっはっはっはっはっは！」

と、ひとしきり高笑いしたところで脇腹をつつかれた。

「ええい、勇者の神聖なる脇腹に何をする！」

「方針が決まったんならさっさと歩きなさいよ」

「歩けたら苦労しない」

「足が震えてるわ」

そりゃそうだ。気が進まないから目一杯気分を盛り上げてるんじゃないか。

この世界の現状が気に入らないから何とか修正したい、それには詩紀さんを頼るのが一番、という結論はとっくにしている。

「怖いならねえやが手でも引きましようか？ お坊ちゃま？」

先ほどの意趣返しか、フレアはニヤニヤ笑いを浮かべながら手をさしのべてきた。

あからさまにへタレの子供扱いされても、ダメなものダメなんだな。

「悪い。足が動かない」

本能が「近づくな」と言っているかのようだ。

「ああもう面倒な男ね」

といいつつ、フレアの声色は弾んでいる。こう見えてお節介な奴なので、頼られるのは嫌いじゃないのだ。

背中に小さな両手が当たった。そのままぐいぐい押される。いかにもちんちくりんで細っこい見かけに騙されてはいけない。腕力的には大輔と大差ないのだ。

「いつもすまないねえ」

「ええい、動け、動け」

ユーニスの屋敷前の石畳は病的なほどピカピカに磨き上げられているので簡単に動きそうなのだが、体重の軽いフレアの方が摩擦が小さいため、押している彼女の方が滑ってしまうばかりなのだ。残念！

「このへタレ勇者！ クソ勇者！ ダメ勇者！」

「なあ、へタレ勇者って語義矛盾じゃね？」

「逃避するなっ！」

怒りの声を上げたフレアは、大輔の背中にとりつくつと、両手でベルトをつかんだ。すぐムキになるなあ。

大輔がつり上げられる体勢になると、その分フレアの方の足の踏ん張りが効くようになる。ある意味で体重を奪われてしまったのと同じだ。こうなると単純な腕力がものを言いはじめる。

「どっせーい！」

そのかけ声は女の子的にはちょっとアレだなあ。しかも、

「動き始めたのはいいんだが、この体勢だと色々当たりそうできずくないか？」

「とっくに当たってんのよ！ 悪かったわね！」

「……正直すまんかった」

ちんちくりんでも年頃の少女である。

「今のは完全に失言だった。無意識とはいえ、女性のプライドに關して深刻な被害を与えたことを猛省し、配慮不足を謝罪するものである」

精一杯殊勝に振る舞ったつもりだが、荷物のように運ばれながらでは締まらないこと甚だしかった。

「謝るな！ 憐れむな！ すまないと思うなら自分で歩け！」

フレアは手を離して急停止。

「おっとっと」

放り出された形の大輔は数歩たたらを踏むが、卓越した勇者バランス感覚により転倒に至らずにすんだ。

おお、足、動くじゃないか。

「おかげでだいぶ緊張感がとれたよ。何とか歩けそうだ。またなったら頼むな」

「二度とやるか！ アンタが私をどんな風に見てるのかよく分

かったわ！」

すっげえ恨めしそうな上目遣いで睨まれた。怖っ。

大輔の相棒は呪いの人斬り包丁の化身だけあって結構怖かったりする。呪剣やばいよ呪剣。

バケモノっぷりや脅威度だけを言うなら魔王の名代である詩紀さんともいい勝負なのだが、何だかんだ言って相棒なのだ。自分に害意を向ける事は無いと全面的に信じられるからこそ、こうして茶化す対象にもなりうる。

そういうわけで、やはり詩紀さんが怖さで勝ると言わざるを得ない。そもそもカースト最上位の同年代女子にこっちから会いに行くなんて、怖いに決まってる。元引きこもりとしてはなおさら当然である（威張る事じゃない）。

「あんたのヘタレが顔を出す前にさっさと御座所に行くわよ」

「了解であります」

ポルフィラ皇宮は珠坂市で言えば市役所を含む位置にあるが、大きさは桁違いだ。ジェムズヒルズの町は最外縁を含めた多重の城壁で囲まれており、その中心が貴族達が棲む宮殿領域となっている。

騎士団本部は宮殿領域の門を含む城壁内にあり、新川の屋敷があるのは宮殿領域の中だ。さらにその最奥部、まさに市役所のある位置に位置する恐ろしく豪華な建物こそが、皇帝と姫巫女の御座所だ。

衛兵に顔ぐらいいはチェックされるが、宮殿領域には一般市民でも簡単に入れる。だが、御座所ともなれば話は別だ。

「さすがに警戒嚴重だなあ」

頑丈な正門は基本的に閉ざされている。立派な装束の衛兵が通行人の一挙手一投足を監視しており、不審者が近づくようならたちまち誰何を受け、あるいは捕縛されるだろう。

「なんと、ダイナス様ではありませんか」

「いらっしやいませ」

しかし、こういう時こそ勇者のネームバリューがものを言う。

衛兵には歓迎され、門番はあっさりと門を開いてくれた。

もう少し渋ってくれても良かったんだが。拜謁させて貰えなかったって言い訳も封じられてしまった。

それでも、ちゃんと水を差してくれる人物もいる。

「おう、勇者さん。今日は何の用だい？」

謁見の間に向かう途中、真上から声をかけられた。

天井の梁から足で逆さにぶら下がっていたのは、金びかかつアジアンテイストな装束に身を包んだ、猿顔の小男（つうか完全に猿）。

詩紀さんの護衛として送り込まれてきた怪^{あぶかし}の代表の一名。

背後の柱の陰から残り二名、体格のいいオークっぽいのと貧相なカッパっぽいのが。見た目は三者三様だが、服装のセンスは似たようなものだ。

それにしても、全く気配を感じさせぬ見事な隠形。まさに動物並みといったところか。

「お主なら分かっているとは思うがのう」

「主殿に害をなそうというなら我々が黙っておりませぬから、念のため」

見た目モロに西遊記の連中に口々に凄まれてもなあ。彼らの腕前のほどは分かっているけど、どうしても怖いと言うより笑いが先に来ってしまう。

あっちではキャロット大聖・ペパーミント元帥・ファンネル大将、三人そろって斗流三獣士等とふざけた名を名乗っていたものだ。

こいつらは詩紀さんの護衛のために送り込まれた樞の従属種族。半分は監視のつもりだったのだろうが、あつという間に詩紀さんの個人的なシンパになってしまったという連中だ。ここでも近衛兵のような立場にあるらしい。

「やあ、お三方。俺相手に凄んでどうするよ。で、三蔵法師はご在宅かい？」

三獣士は困惑して顔を見合わせたけど、代表のキャロットが答えにくれた。

「それは察するにアルジエンティーナ狓下の事かな。ならばいつものごとくさ。たまには顔を見せて慰めて差し上げてくれよ」

うーむ。

「一般人やオーガヘッドの連中はやたらとアルジエンティーナを怖がるけど、全然ピンとこない。だからこそハッターには最高の名前なんだけど。ちょっと気の毒かもね」

とはフレアの弁。

ファリメウルで詩紀さんを直接知るものは大抵彼女を畏怖していたものだが、こちらでアルジエンティーナを直接知るものは彼女に対して同情的だ。

素直に聞けば気が楽になる情報なのだが、その差の意味が分からないだけにかえって薄気味悪さをかき立てられるな。

三獣士達に仲介を頼んだ後、控えの間で待つことしばし。

「勇者ダイナス様、サルトル伯爵令嬢エルフレア様」

「アルジェンティーナ殿下がお会いになります」

大輔達を呼びに来たのは、宮藤のメイドさん達、初さんと終さんだった。物理的破壊力ではレインさんにも劣らぬ『北落師門』憑きの双子である。

こっちの世界でもまるつきりメイド姿なんだな。片側ずつの長手袋が微妙に豪華になった程度か。

と、敢えてつまらないことに感心する事で嫌な緊張感を振り払おうと努力する。すぐ隣の部屋に七夏さん抜ききの詩紀さんがいると思えば、緊張するなと言う方が無理というものだ。

「おひさっす。プリマさん、テルマさん」

フレアの馴れ馴れしくも雑な挨拶で、双子のこちらでの名前を知った。何というか、まんまだな。

対する二人はスカートを持ち上げて膝をかがめる優雅な会釈を返してくれる。

「じゃ、遠慮無く入らせてもらおうわ」

向こうでやってるみたいに極端に猫かぶるのもどうかと思うが、せめてこういう場では優雅に振る舞おうってつもりは無いのかと、相棒様の態度にちょっと呆れる。宮藤本家のご令嬢達（しかも年上）を相手にしているとはとても思えない。

いや、こういう気まぐれな行動こそ、いかにも猫っぽいというべきかもしれないが。

「ほら、遅れないでついてきなさいよ、ダイナス」

あくまでもお気楽な態度のフレアは大輔の手をひつつかむと、

有無を言わずつかつかと歩を進める。エレガントさなんぞ知ったことかと言わんばかりだ。

でもそれで正解。

ここで立ち止まってはまた足が動かなくなるきわどいタイミングだった。さすが相棒、大輔のことをよく分かっている。

さしずめ、呪剣に引かれて魔王参りとも言ったところか。自分の冗談ながら、なかなか笑えない。ここは、子供の手を引く母親のよう、とても言っておこう。頼もしい相棒の手の感触は、それに近い安心感を与えてくれるのは確かだ。

それでも謁見の間に踏み込んだ瞬間には身体がこわばるのが分かった。

だが相棒の手にも同じように力が入るのを感じて、少しだけ微笑ましく思い、そしてなぜか少しだけほっとする事ができた。

「ようこそ、親愛なる勇者ダイナス、それにフレア」

第一印象は、拍子抜けだった。

大きすぎる豪華な玉座に腰掛けてアルカイックな薄笑いを浮かべている人物は、本当にあの彼女なのだろうか。

斗流宗家は分家の坊主にとってはいわば殿上人だ。面識はあるが特別に親しいわけではないし、詳しく語れるほど彼女について詳しいわけではない。

だが、得心できない。あの日篤史さんと宗家の座を賭けて争った彼女は、あんなものだったか？

編み上げたプラチナブロンズに宝冠を乗せ、白黒基調のドレスで人形のように着飾った少女は、繊細で美麗なおとぎ話のお姫様そのもの。

見た目に騙されてはいけないというのは身にしてみても、それはもう身にしてみても理解している（例えば相棒の件だ）が、むしろ見た目以外の部分がスカスカに感じられてならない。

先だってフレアがオーガヘッズに叩き付けたものをさらに上回る強烈なブレッシャーに襲われることを覚悟していたが、全く何のこともない。

ただ豪華なだけの部屋、豪華なだけの椅子、そしてその主は綺麗なお人形さんのように見えた。

「ディナシウス・ユリヒト・パーシオン、罷り越してごさいます。アルジェンティーナ殿下にはおかれましてはご機嫌麗しゅう」「サルトル伯爵の娘、エルフレイアです。このたびはお目通りをご快諾いただき、光栄至極に存じます」

こっちでは結構傍若無人なフレアも、さすがに詩紀さん相手には丁寧だ。別に威光にうたれたとかではなく、単に場の空気に合わせただけのようだが。

「世は全てことも無し。それも皆の働きあつての事です。これからも変わらず励んでいただきたいものです」
何なのだろうか、この暖簾に腕押し感。

挨拶から後の会話が続かない。いかにもあつさりした口調で、とにかく精気に乏しい。

彼女が返したのは型どおりの当たり障りのない挨拶だけ。謁見の目的を尋ねさえしない。人工知能を積んだロボットでももうちょっと気の利いた反応を返すところだろう。

畏怖を感じさせるところか、サルトル卿やコーディーさんと大差ない抜け殻状態じゃないか。

しかも。

鬼化の多発が問題になり、反教会・反帝国派が足下に蔓延っているのご時世に、「こともなし」と来た。

鋼の自制心を持つと自認する大輔ではあるが、さすがにこれにはカチンときた。

大輔達二人の目的どころか、この世界の現状にもまるで興味が無いって宣言したようなものだ。空気読めない発言にも限度ってものがある。

生き神様として選ばれた筈の姫巫女が、支配対象となる世界に對しての興味を失ってしまった。つまりは、人々は主に見捨てられた世界にあって、なお加護の下にあると素朴に信じて生きている事になる。ひどい裏切り行為ではないか。

オーガヘッドのサイラスは自分たちは弾圧されていると主張し、恨みと怒りの果てに鬼にまで堕ちてしまったが、彼ら言うところの邪悪の権化とやらは彼らを危険視するどころか全くの無関心だったわけだ。サイラスは人格的にはだいたいアレだったし、明らかに小人物の部類ではあったが、ただあんな最期を遂げるほど極悪だったとまでは言えなからう。さすがに気の毒になってくる。奴も浮かばれまいて。

先ほどまでびびっていたのがばかばかしくなってきた。七夏さん抜ききの詩紀さんは危険だとばかり思っていたが、むしろ活を入れる必要があるぞ。

聖上の過ちはこれを正さざるべからずってな。七夏さんに代わって諫言ぐらいはしないと、わざわざ御座所までやってきた意味が無からう。

「ことも無し？ 奇妙ですね。町の中のあつちでもこつちでも人が鬼に変わってるって話はご存じない？」

雲の上の人相手に、目一杯嫌みったらしく言ってやった。気持ちはいい！(小人物並感)

我ながら情けないことだが、相手が温厚だと分かると急に強気になるな。

「ええ。それが彼らの望みなのだもの。人を超える力を欲した者が鬼に変わり、相応しい想いの者が想いに相応しい姿に変わっているだけ」

アルジェンティーナ殿下ときたら、予想の斜め上のおっそろしいお言葉を宣ってくれた。

「いやいやいや、そんなん叶えちゃダメっしょ」

そりゃあ、時には魔がさす事もあるさ、にんげんだもの。

小人物には小人物なりの情けない野望があるもんだろうし、過去のダイナスのようなチート無双勇者様であっても、心の奥底までいつ何時でもイケメンでい続けるなんてのは困難だ。そんな微妙な内心の(下手すると無意識な)事情までいちいち感知しては、妙な形で実現されちゃたらん。

「どうして? 一方には悪者と戦って人々を護りたい者も数多くいるわ。それには十分な数の敵と護られるべき相手が供給される必要があるでしょう。悪が生まれ、正義が生まれ、悪が減び、秩序が保たれる。そして、正義を信じた者達の望みもまた満たされるの。これでも最大限の効率と調和をもって願いを実現しているつもりだけだ」

悪は滅びぬ、人の世が続く限り。つか。

そんな言い方をされると、悪をくじき正義を信じる心まで自分勝手な邪悪な願いに聞こえてくる。

確かに嫌な意味での真実かもしれないが、為政者が全肯定し

ちゃっていいのか?

「私はすべての願いを平等に取り扱う事しているわ。誰もが平等に危険にさらされる敵しく正しい世界のバランスを崩さないよう、広く薄く、ささやかな奇跡を最大多数に届けるのが自分の使命だと理解してる」

人の意思を介在させることを良しとせず、つとめて一個の現象たらんとする。いわば巫女姫機関説である。

むしろ、人外の力を人の心でコントロールする点こそが斗流のキモだと思うのだが。気の迷いや邪悪な願いまで機械的に形にしてどうする、と突っ込みたい。

「このような立場に祭り上げられてはいても、私もまた神ならぬ人の身に過ぎないのよ。そんな私がえり好みをしてしまっっては、自然の摂理による秩序は容易く失われてしまうでしょう。だからこそ全身全霊を賭けてあらゆる声なき声に耳を傾け、慎重に制御を続ける必要があるの」

金魚たちにわざわざピラニアの牙を与え、水草にはトゲと毒を与え、それでバランスがとれたと言えるのか。大輔的にはそんな殺伐とした調和水槽は願い下げだ。

あるいは、内戦中の国に武器を売りまくっては、決して誰にも肩入れしてないと嘯く大国の言いぐさでも聞いているようだ。本気で彼らの願いを聞き届けたいと思っっているのかさえ疑問になっってくる。

弱肉強食を全力で支援。そこに本当に悪意がないと言えるのか?

ヤバイよこの人。ヤバすぎる。

しかもだ。

姫巫女様はさっきから空中をぼーっと見つめたままで、大輔達と視線を合わせようとしなない。確かに饒舌ではあるが、表情にも声の抑揚にも乏しく、淡々と自説を開陳しているのみ。

大輔にもドリフト直後の離人体験はあるが、それだけではなさそう。心ここにあらず、っていうのが一番しっくりくるか。

意識や興味の大部分を何か別のことに集中していて、適当に受け答えしているように見られる。学生への講義では教科書とはかけ離れた自分の研究内容をひたすらぶつづつ呟きつつ淡々と事務的に板書しては消し続ける教師とか、ちょうどああいう感じだ。

「狎下っていつもこんなほけっと、もとい朦朧としていらっしやるんですか？」

傍らに控えるメイドさん達に尋ねてみる。

「はい。アルジェンティーナ様は使用可能な力のほとんどを世界の制御に費やしていらっしやいます」

「ご自身のことを顧みる余力さえ十分ではないため、身の回りの全てを私たちがお世話させていただいております」

大輔の知る詩紀さんは終さん（長手袋が右側でサイドポニーテールが左側）の方と行動を共にすることが多かった。こちらではメイドさんが二人ともべったり張り付いてるのに違和感があったが、なるほどそういうわけか。

幼なじみでツーカーのメイドさん達に生活のほとんどを頼りきって、対人用に回すリソースは最小限とは。オンラインゲームに全精力をつぎ込み、社会生活どころか食事まで蔑ろにする廃人ゲーマーを彷彿とさせる。

そこまでして何をやっているかって？ 決まっている。彼女本

来の仕事だ。

新川さおりさんの説明によれば、白銀珠比女命は人々の精魂をたばねるハブとして働いている。彼らの願いや祈りを取捨選択し、個々の魂の力を束ねて奇跡を起こすのだ。不敬と怒られる事を覚悟でざっくり例えるなら、いわば魂信用協同組合の管理者のような立場だ。

実際の「奇跡」の行使のためには休眠状態の星鬼である樞の精魂回路が動作しているものと想像されるが、樞に対し必要な作業を指示するオペレーターに当たるのが詩紀さんの精魂、という事になるのか。

実際にやらかしているのは樞であっても、それを命じているのは詩紀さんの意思でしかありえない。オーガヘッドの「諸悪の根源アルジェンティーナ」説にも一理ぐらいいはあったわけだ。

「要するにゼーんぶアンタの仕業か！ こんな殺伐とした世界がアンタの望みなのかよ！」

異常なほど仕事熱心なのはともかくとして、方向性が決定的にただけなないと思うのだが。

少なくとも、全精力を注ぎ込んでまで実現するほど素晴らしい世界とは思えない。すべてを人々のせいにつつ、自滅を後押ししてるようだ。

「ええ。祝福され、秩序のもとで調和がとれた理想郷ですが、何か？」

と、本人はまったく悪びれない。

まあ、生き神様の考えを人が推し量ろうなんて時点で無理があるか。素人目には悪手のように見えても将来的に何らかのカタストロフの回避に繋がったり、といった都合があるのかもしれない。

だが、ねえ。

「確かに。この世界が完璧な秩序を手に入れた天国なのか、はたまたまディストピアなのかの判断は、神ならぬ俺にとっては荷が重いよ。人間には計り知れない深遠遠慮があるのかもしれない。それでも、一つだけどうしても気に入らない事がある」

玉座の巫女姫へと、人差し指を突きつけた。異議あり！

「この世界、アンタにとっては大して意味の無いものなんだ」

彼女は彼女なりに管理をしているのかもしれない。だが自分が当事者であるという自覚はどうだ？

矛盾に満ちた不完全な世界をそれでも愛しているなら、試行錯誤のもと足掻き続けるものだろう。

世界の無慈悲さに機械的にはっぱを掛けつつ自然の摂理と調和をうたうなんてのは、ゲームの縛りプレイと同じじゃないか。非常識なまでに熱心ではあっても、何が何でもという真剣みを感じられないし、人々の運命を一手にあずかっているという重さが伝わってこない。

彼女にとっては何の命も心も願っても、ゲーム内の数値データと大差ないんじゃないだろうか。

「ナナさんが居ない世界なんてアンタにとってはどうでもいいのかも लेकिन、お馬鹿でも小人物でもみんな真剣に生きてるんだ。興味無いなら無いで、いらんこととしてかき回さず欲しんだが」

今いいこと言った！（我ながら小人物である）

すべてが大輔の夢なら、大輔にブーメラン直撃だが。この際その可能性は忘れる！

果たして、アルジュンティーナの反応はといえよ。

「……ナナが愛した世界よ。だからこれほど大切に扱ってる」

返答にわずかに間があった。先ほどまでの能面がわずかに崩れ、視線がゆっくりと大輔に向く。

さすがに七夏さんの名前を出されれば、少しぐらいいは心に届くのか。

やり口は少し（だいぶ）間違ってるとしても、どうでもいいってのは言い過ぎだったかもしれないな。

「悪い。ちと言い過ぎた」

「そっか」

これまで静かに話を聞いていたフレアが、得心いったように呟いた。そして皮肉な笑みを浮かべる。

「ねえアージェ。もしかしてこの世界の事、嫌いなんじゃないの？」

今度こそ、詩紀さんの表情がはっきりとこわばった。

「ナナさんを見捨てた世界で、ナナさんが居なくなっても幸せに生きている薄情な人々が許せない。世界はあまねく平等で公平で酷薄であるべきで、大切な人を失う辛さを誰もが知るべきだ。そうよね？」

「……ち、違うわ」

菫色の目を見開き、激しく首を振る詩紀さん。

「ちよっ、おまー！」

なんてこと言い出しやがる。

「そのために世界の醜悪な面をわざわざ掘り出しては、いちいち曲解しては具現化してるんでしょ」

「フレア様！」

「言葉をお慎みください！」

大輔だけでなくメイド兼護衛の二人も加わって取り押さえようとするが、すばしっこいフレアは三人の腕を巧みにかいくぐり、とうとう決定的な一言を放った」

「そろそろ自覚したらどう？ あんたはナナさんの愛した世界を祝福するどころか、全力で呪い続けているのよ」

あああああああ、言っちゃった。

普通はそこまでは裏読みしようとしないうし、考えついても口には出さないだろ。

「この惨状、彼が見たらさぞかし軽蔑するでしょうね」

さだめ押し。女って怖え！

たとえそういう成分があったとしても、そこは苦しさとかやるせなさとか、愛しさと切なさ（略）とか、いろんな感情と葛藤をこえた合理化の果て。生き神様だって人間の感情とは無縁ではられない、としか言いようがない。百パー悪意みたいに言うのは言い過ぎだ。

あと一訂正。七夏さんなら、もっとひどい状況でも間違いなく詩紀さんを擁護する。

地雷の上でわざわざジャンプした結果は、最初から予想されてしかるべきだった。

「……そうね、そうかも」

どこまで自覚があったのかはわからないが、アルジェンティナは絶句した後に顔を紅潮させ、それから開き直った。

「肯定するわ。フレア、あなたの言うとおりだと思う」

玉座を立っただけだというのに、彼女の決して大きいとは言えない体軀が、何倍もの大きさに感じられる。

「いけない！」

「狛下、お気を静かに！」

宮藤のメイドさん達でもここまで慌てるのだな。その事実だけでも、どれだけ危険な状況か分かる。

「でも、大切なものを失うってのはそういうものよ。幸せな貴女にはわからないでしょうけど」

祟り神爆誕生であった。

殺気を通り越し、痺気さえまとった視線をまともに受けたフレアが、猫のように全身の毛を逆立てながら、不敵に嗤う。

「まあ今はね。でも、私にだって失ったものはあるの。だから私が言わなきゃならないと思った」

確かに詩紀さんの立場は、母親であるお志摩さん（こっちではシモーネさんか）を亡くしてから『茨の園』の制御に苦しんでいた睡蓮に通じるものがある。睡蓮は口には出さなかったが、心の奥底にはそういった恨み辛みの成分があったのかもしれない。

「そうやって自分を哀れんてる間は、一歩も前に進めないわよ。しゃんとしてよ、我らがお姫様」

今フレアがいいこと言った！

これを言いたいがための挑発だったわけね。

でもな、そういう説得が通じるぐらいなら、こんなに危ないことにはなっていないわけで。

今迷路の中にいる人間には、既に脱出した人間からのエールなど勝者の余裕としてしか届かないものだ。

それほど強くないが、覚えのある頭痛が大輔を襲う。ほら見たことか。

ぶちキレてやがる。早すぎたんだ。

意識朦朧の時間はそれほど長いものではなかったようだ。

気づけば、御座所の正門前に突っ立っている自分を発見する。

このパターンのドリフトはあまり経験が無いが……何というか、RPGでボスキャラに到達したのはいいが、まだ特定のフラグが立っていないとかキーアイテムをもっていないとかで、ダンジョン入り口まではじき出されたような、そういう感じだろう。

ちょうど交渉決裂したところだったので、わざわざ歩いて建物を出る手間が省けたと言うべきかも。あー得した得した。

アイテムがごっそり無くなっている、とかいう事はなさそうだし（もともと大したものを持っていないが）。衣服もちゃんと残っている。左腰が不自然に重いが、そこは見ない（現実逃避）。

ある可能性については努めて考えないようにしつつ、さっさとこの場を離れることにしよう。嫌な予感がするしな。

「おい貴様、ちょっと待て！」

ほらいらっしやっただけ！

「お、俺は勇者っすよ。勇者ダイナス。普通顔パスでしょ？」

「何を言ってるんだ貴様は！」

「なあ、こいつ手配書で見たような気がしないか？ あー、なんだっけか。デ、ディ、ディガシナスだっけか」

ディナシウス、な。と口には出さない。

「ってえと、十聖家の師弟のくせにオーガヘッドの反逆者どもに荷担したっていう、あいつか。似てるような似てないような」

先ほど歓迎してくれたばかりの衛兵達の目が、完全に犯罪者を

見るそれだ。

なんて嫌な感じにドリフトしてるんだ！

「待て待て。今手配書を持ってくる。そいつ逃がすなよ」

「あー、よく言われます。ディガシナスとかいう人と間違われることが多いんですけど、他人の空似ですよ」

「本当かあ？ 怪しい奴め」

あー、雰囲気が悪くありませんな。ここは三十六計。

「フレア？」

背後にそう囁いて、ちらりと振り向く。察しのいい相棒のことだ。彼に遅れる事無くついてきてくれるはず。

が、相棒の姿はどこにも無い。まさか、別々に跳ばされたのか？

「やっぱりそいつだ！ 逃がすな！」

混乱していても、訓練された身体は勝手に動く。衛兵の低いタックルを予測してジャンプでかわしつつ、飛びかかってきた衛兵の頸に回し蹴り。着地と同時に先の衛兵の後頭部に踵を入れる、そのままノーウェイトでダッシュ開始。

振り向く余裕はない。

フレアにも手配が回っているかどうか調べたかったが、今はそれどころではない。サバイバル能力は大輔よりずっと上だ。それを信じよう（さらに現実逃避中）。

一歩蹴るごとに、堀を跳び、堀を越えるごとに、左腰の重さが存在感を訴える。

「まっしてえ、ディガシナスうー」

次第に数を増やしつつ追いかけてくる衛兵達を撒くには手間取った。気がつけば宮殿を遠く離れ、城郭都市の外れも外れ、最外城壁近くまで来てしまっている。馬小屋に蓄えられた干し草の

中に飛び込んで最後の追っ手をやり過ぎ越し、ようやく息をつく。あの面長のだみ声衛兵、しつこいのなんのって。

「あいつ、あだ名は「とっつぁん」だ。今決めた。そう決めた」
ついこぼれた愚痴に呼応するように、相棒が笑った。ような気がした。

あえて見ないように、見ないように努めていたのに、不意打ちのような笑い声に、つい目をやってしまった。

当然ながらそこに苦笑する相棒の姿はなく、左腰でカタカタと鳴っていたのは一振りの剣。

素朴かつおどろおどろしい装飾を施された柄も鞘も黒一色。彫り込まれた金釘亜流の文字は大輔には読めないし、来歴を語れるほど詳しくもないが、銘だけは熟知していた。

「……ダインスレイフ」

毎日会っていた相棒だというのに、剣の現物を見るのははじめてだった。

姫君は看病したい

春屋アロツ

くあーっ、とカイナが大あくびをした。人より鋭い虎人族特有の犬歯の目立つ大きな口を閉じて、カイナの目は眠そうに扉に向いた。

「まーだ帰ってこねーなあいつ」

あいつ、というのは彼女の以前の相棒、レンジのことだ。曖昧に「代理人」と呼ばれるよろず代行業を営む青年で、今日は夕方から依頼主のところに成果報告に行っている。一人で行ったのは、依頼人と二人で酒を飲んでくるからだ。なにやら依頼の時から意気投合していて、成否も知れないのに前祝いと称して二人で遅くまで飲んでた。酒を口にしないカイナとユキホは先に帰ってきた。

「カイナは先に休んでいてください。私は起きていますから」

「ユキホも寝てた方がいいんじゃない？」

「私は週に一度で十分ですから」

そう答えたユキホはカイナのベッドから自分のベッドに移った。知らない人が見れば、虎のような下半身と長いしっぽ、ふさふさした毛に覆われた耳を持つ虎人族のカイナはともかく、作りもののような美貌と雪のように白い肌を除いて特別なパーツのないユキホを人間でないとは思わないだろう。だが、彼女は五百年前に世界の大半を滅ぼした「終末の日」を生き延びた中の一人で、カイナとレンジに説明した言葉を借りれば「判断力と学習能力を与えられた人形」だ。現存している彼女の仲間は皆故障していて、由来もわからない現代人には神姫像と呼ばれて崇められているが、

ユキホは知る限りではただ一人、故障せずに動いている。

カイナはそんな彼女の素性をすべて理解しているわけではないようだが、友人として扱ってくれているし、こうして人にはあり得ないことを口にしても、それに何を言うでもなく受け入れてくれる。

「じゃー寝るね。お休み」

「お休みなさい」

カイナはもう一つ大あくびをして、シーツの中に潜り込んだ。カイナは寝付きがよくて、こうして横になって目を閉じると、遅くとも数分で寢息が聞こえてくる。そうして静かになった部屋の中で、ユキホは一応同じようにベッドに入って目を閉じる。いつもは一時間ほど完全に機能を停止するが、今夜はレンジが帰っていないから、とそのまま静かに待った。

おおよそ三時間後、レンジとおぼしき足音が上がってきた。こちらの様子を見に来るかユキホは身を起こして待ったが、レンジは隣の部屋に入ってそのままベッドにどしんと身を投げたようだった。そのまま動く気配がない。ユキホはまた枕に頭を乗せると、機能停止はしないまま目を閉じた。

翌朝。二人が身支度を調べて隣の部屋をノックすると、中から唸り声が返ってきた。

「……レンジ、何と言ったのでしょうか？」

「何でもいよいよ。入るよー」

鍵はかかっておらず、ドアは簡単に開いた。レンジはまだベッドの中にいた。

「また二日酔いかよ。おら起きろー」

シーツをバサリと引っぱがされて、レンジは渋々体を起こした。

普段から朝は弱いレンジだが、それにしても動きが重そうだ。

「うう、あつたま痛え……」

「飯食つて水飲んだら直るだろ。さっさと顔洗ってこいよ」

言い置いて、さっさと部屋を出ていってしまつた。ユキホはふらふらと洗面器に向かうレンジに話しかけた。

「体調が優れないなら食堂から食べるものを運びます」

「ああ、いーよいよよ。今日は仕事もないし、しばらくしたら直るから」

先に下りてて、と言われて、ユキホはその言葉に従つた。部屋を出る前に振り返ると、少し動きは緩慢に見えたが、ちゃんと顔を洗っている。倒れたりほししないと見て、階下の食堂に下りた。カイナの座っている席の正面に腰を下ろして、パンとオレンジジュースを頼んだ。

「レンジ、二度寝してなかった？」

「いえ、私が部屋を出たときに顔を洗つてましたから、じきに下りてくると思います」

「ん、ならいいけど」

カイナはそう言つて、先に届いたパンにバターを塗つてかぶりつく。大きめの丸パンが一つなくなる頃にユキホの分も運ばれてきて、ユキホも一つ食べきつた頃になって、ようやくレンジが降りてきた。

「プレリー・オイスター」

ユキホの隣に座つたレンジが注文すると、カイナは露骨に嫌そうな顔をした。ユキホは今注文したものが何かわからないが、メニューに載っていないのは間違いない。

「今頼んだのは何ですか？」

「二日酔いに効くんだよ」

「ゲテモノだよ」

一つの質問に二つの答えが返ってくるのはよくあることだ。カイナの答えからするとあまりおいしいものではないのだろう。問題はレンジの答えだ。

「先ほどカイナも言つていましたが、二日酔いというのは具体的にはどういう病気なのですか？」

ユキホが尋ねると、二人は顔を見合わせた。

「そっか、二日酔いつて知らないんだ。昔はそういう人いなかったの？」

「私は人形兵のみで構成された警備部隊におりましたから、人間と接した期間は長くありません。遭難した人間の救助を行うことはありましたから、山の中でかかることのある病気についての知識はありますが、そうでない病気については知りません」

「なるほどね。つか、二日酔いつて病気つて言うのかな」

「微妙なところだが」

レンジは考えをまとめるように一拍おいてから話し始めた。

「二日酔いつてのは酒を飲み過ぎると、翌日に頭痛がしたり体がだるかつたりすること。俺も今朝起きた時から頭が痛いし、だるい」

「……該当するものではありませんが、アルコールの過剰摂取が原因なんです」

「そう。俺もこれまで何度か夜飲んでつけど、ユキホの前でこんなになつたのは初めてだったよね。一定量までは飲んで大丈夫なんだよ」

具体例を出されて、ユキホは納得した。続いてカイナに視線を

移す。

「では、カイナがお酒を飲まないのはそれと関係がありますか？」

「いや、ないねー。あたしは酒嫌いなんだよ。味が」

これまたシンプルな理由だ。もう一つ納得したところで、店員がカクテル用のグラスを持ってきた。卵黄に何か複数の調味料がかかっているものようだ。少なくとも飲み物ではない。

「おまちとおさま」

「うえ」

カイナは鼻をびくりと動かすと、顔を背けた。ユキホはレンジに断つて、そっと顔を近付けた。個性的な匂いが漂ってくる。鼻のいいカイナが嫌な顔をする理由はわかった。

「これがプレーリー・オイスターですか」

「そ」

レンジも味や匂いが好きではないらしく、鼻をつまんで一息に飲み込んだ。

「ユキホは二日酔いになったりしないの？」

「アルコールの過剰摂取で機能に異常を来すことは基本的にありません」

そう答えると、カイナは感心したように言った。

「ユキホって体やたら強いよね。雪山を裸足で歩いても凍傷にもならないし風邪も引かなかったじゃない」

「はい。風邪もウィルスが原因のものばかりません」

「病氣しないんだ。いいな」

「そうだな。なんだかんだで病氣もらうことはあるし、俺らは重い病氣にかかったらまずアウトだもん」

カイナが言うのと、レンジも頷いた。

「アウト、というと、治療が難しいということですか？」

「ああ。風邪くらいなら安静にすれば治るけど、治療費が高い病氣だと俺らの財布じゃどうにもならない」

「私たちは遭難者がいれば手当をするよう指示されましたが、それが通用するわけではないですね」

「葉だって高いしな」

世知辛い話だ。かつては自分のものを買うということのなかったユキホも、二人の視線で見た経済について少しずつわかってきた。労働の対価として金銭を得て、それを様々なものと交換すること。入手しやすいものや品質のよくないものは安く、手に入りにくいものや品質のよいものは高いこと。二人が代理人として得ている金銭は労働者としては高い部類だが、主に仕事をくれる貴族や豪商の収入とは比べものにならないほど少ないこと。

「だから病氣しないってのは大事なんだ。例えば病人に近付いたり、公衆浴場に行ったり、流行病があるところに行ったりするのは危ない」

「理解しました」

「二日酔いで済んでるうちはいいけどね」

フォークをもてあそびながら、カイナはレンジをじろつと睨んだ。

その数日後。夕暮れ時に仕事を終えて先に宿に戻ってきたユキホは、一緒に帰ってきたカイナの口数が妙に少ないことに気付いた。ついさっきまで街中を走り回っていたから気にしていなかったが、しばらくゆっくり歩いているのに体温が落ちていない。

「カイナ。風邪ですか？」

ユキホの方を向いたカイナの頬が桃色に火照っている。口を開

きかけて、ぱっと顔を背けた。くしっと小さくくしゃみをして、鼻をすすりながらまた振り向いた。

「んー、そうかも。頭ボーンとする……」

「薬はありますか？」

「ないない。寝てたら治るよ」

ぼんやりした顔でそう言って、もうひとつくしゃみをした。

部屋に戻って汗をかいた服を着替えて、ついでに汗をぬぐってからベッドにもそもそと潜り込んだ。いつも寝付きのいいカイナのこと、あつという間に寝息を立て始めた。

しばらくしてレンジが帰ってきた。足音で気付いたユキホが出迎えてカイナの様子を伝えると、レンジはやっぱりか、と呟いた。

「もう寝たんだよね？」

「はい」

「ならとりあえずはそのまま寝かしとけばいいよ。俺らは飯にしよう」

レンジはそう言って、自分の部屋に荷物を放り投げて、階下に降りていった。ちょうど夕飯時とあつてざわついているが、空席を見つけると二人で向かい合つて座つて、いつもどおりに食事を頼む。

「カイナの夕飯はどうしますか？」

「起きたら食うと思うけど……なんか買つていてやるか」

二人の食卓はいつもより静かだ。カイナがどちらかに話しかけて会話が進むことが多いから、会話を回す人がいないと話が弾まない。ユキホは気になつていたことをレンジに尋ねた。

「病気の時はどうやって対応するんですか？」

「基本的には食つて寝るだけだな。胃が弱つてるから柔らかいも

のを食べるのがいいってくらいで」

「……治療や投薬は費用がかかるから、ですか」

「それと、特に病気は医者と言うほど薬が効くわけじゃないつてもある。高い金払つて結局治らなかつたり、余計悪くなつたりすることもあるから、できるだけ医者や薬にはかかりたくないだよな」

そう言ったレンジは少し間を開けて思い出したように、怪我の場合は別だけど、と付け加えた。

食べ終わる前に頼んでおいたミルク粥が来るのを待つて、二人はカイナの寝ている部屋に戻つた。まだ起きていないらしく、規則的な寝息が聞こえる。下の喧騒にも気付いてもないのだろう。レンジはカイナの寝ているベッドの奥に長い足の付いた台を置いて、水の入った鍋を置いた。その下から魔術で火を点けた。ユキホが二人と初めて会つた雪山ではこうやって鍋に入れた雪を溶かし水を作っていたが、今は水を温めている。

「何をしているんですか？」

「いや、鼻が詰まつてるみたいだから少し湿気があつた方が喉が楽だろうと思つて」

やがて水が沸騰してポコポコと音が立ち、湯気が上がり始める。鍋一杯分の水ではそんなに保たないが、ないよりはマシということだろう。自分の手元を見ながら、今度はレンジがユキホに話しかけた。

「まだしばらく起きないだろうから、起きたらそれ食わせてやつて」

「わかりました。それは続けた方がいいですか？」

ユキホが鍋を指さすと、これはいいよ、と返つてきた。

「俺は魔術で火をおこせるけど、ユキホはこういうのでできないでしょ」

「通常の方法で火をおこして番をすることなら」

「いやいややダメダメ、部屋で焚き火したら火事になる。煙も出るし」

慌てた顔で釘を刺されて、ユキホはおとなしく諦めることにした。

鍋が空になると、レンジは鍋を片手に部屋に戻っていった。鍋の水が沸騰する音も聞こえなくなつて、部屋の中はしんと静まりかえっている。

ユキホはいよいよすることがなくなつてしまい、自分のベッドに座つてカイナを見守っていることにした。ユキホの体は二人にうらやまれるくらいに頑丈にできているが、レンジのようにカイナに何かしてあげることはできない。ただ見守っているだけだ。そのことに落胆しているのが自分でもわかつた。

レンジは落ち着いていたが、ユキホにはいつもたくさん食べてよくしゃべる元気なカイナが、口数も少なく夕飯も口にしないので寝てしまったのが不安で仕方がなかつた。

「心配」

終末の日と呼ばれるあの日、雪崩で損傷した同僚と洞窟の中で眠りにつくまでは感じたことがなかつた。その次に目を覚ました時は、傍らの同僚が氷に埋まっていることに驚いたが、心配はしなかつた。修理すれば直るだろうと思つて、程なくまた眠りについた。そして次に目覚めた時にレンジとカイナに出会つた。あの時も不安だったのは自分のことだつた。他人の心配をする、自分のことではないのに不安に思うのは初めてかもしれない。

そういえば、と思ひ出す。数日前にレンジが二日酔いで唸つていた時もユキホは心配になつたが、カイナは特に気にした様子もなかつた。お互いの不調を心配していない、わけではない。少なくともレンジはカイナのために夕食を準備したり湿度を上げたりしていた。不安にならないのは、深刻な状況かどうかを知っているだけだ。

「んん……くふあ……」

小さくあくびをして、カイナがもぞもぞと動いた。こちらを振り返つて目を開ける。

「あー、おはよ。どれくらい寝てた？」

「五時間ほどです。ミルク粥がありますが、食べますか？」

「食べる食べる。ちよつとおなか減つた」

ベッドサイドに置いてあつたミルク粥のお椀とスプーンを渡す。すつかり冷めてしまつたが、カイナは気にする様子もなくさらさらと食べた。体温は少しだが下がってきている。時折鼻をすすつているが、声にも元気があふれるし、快方に向かつているらしい。

「体調はいかがですか？」

「鼻水がうつとうしいけど、頭すつきりしてきたから、たぶん明日には治るよ」

「そうですか。それはよかつた」

自然と微笑みが浮かぶ。カイナは驚いた顔をしたが、すぐにニカツと笑つた。ユキホが見たかつた笑顔だ。ユキホはカイナからお椀とスプーンを受け取つて、また横になつたカイナのシートをかけ直した。

「では、朝までお休みなさい」

「はあい」

猫と二人で

Fukapon

間もなく日が変わろうという時間、彼女は吊革を手放しバスを降りた。

「あーあ、結構降ってるなあ」

彼女、笠松^{とまき}時子は天を仰ぎながら独りごちた。

駅までは百数十メートル、このバスが駅前ロータリーに入ってくればと愚痴っても仕方がない。このあとの予定は帰ってお風呂に入るだけ。多少濡れることを気にするほどでもなからう。

そう思うと雨もなんだか心地よく、年甲斐もなくスキップなどしたからだろうか。いつもは見向きもしない公園が時子の視界に入った。

(こんな時間でも意外と人がいるのね)

視線の先には水色の傘。街灯に照らされ明るい色が映える。傘の持ち主は屈んでいるのだろうか。傘の位置が低い。

だからどうと言うことはない。時子は視界から外れるまでの、つかの間の観察を終え、いつも通りに横断歩道の信号を待つ。青色が灯ると、流れ出す人波に乗って横断歩道を渡り駅へと入った。

翌日もまた、時子は真夜中を目の前にバスを降りた。

逆方向のバスに乗ったのは十五時間以上も前だ。この時間に帰ることを望んではいないが、会社勤めとはこんなものだと諦めている。彼女が生まれた頃、三十数年も前の昔なら、彼女のような存在は〇しと呼ばれ、制服を脱いでアフターファイブなんてこと

もあったのかも知れないが。

夜だろうと灯りで照らされた歩道を少し進むと、時子は意図して足を止めた。

「今日もいるんだ」

公園の中に人影を認め、彼女は小さく声にした。

ここ東京では二十四時間三百六十五日、どこにだって人がいる。東京暮らしの長い時子は十分承知している。真夜中の公園とて例外ではなく、幼い子を遊ばせてる姿が見られることも珍しくない。ただ、家路を急ぐ彼女がこの公園を目に留めたのは昨日が初めてだった。

ちよつとした発見。ちよつとだからこそ、彼女は何となく踏み出せたのだろう。

歩みを歩道から外し、次の一步を公園に向けた。カツカツとアスファルトを蹴っていたヒールは、土の地面に音を消される。

はて、どうしたものか。

奥の方で今日も身を屈めている人、時子の興味の対象はその人だ。しかし、興味をどうぶつければよいのだろうか。こんな時間に突然話しかけるか。逆の立場だとしたら、時子は声をかけてくる怪しい人から逃げると断言できる。確かな理由があつてそこにいるであろうあの人を追い出すのは本意でない。

黙って接近して黙って眺めるか。逆の立場だとしたら、やはり見つけている怪しい人から逃げると断言できる。あの人の邪魔をすることは間違いない。

一体全体どうしたものかと思案している彼女の姿はすでに、公園の真ん中で突っ立っている怪しい人だ。しかし当人は気付くはずもなく、しばらく思索に耽った。

まだまだ結論は出なかったが、事態を打開したのはキュートな声だった。

「みやお」

時子は声に誘われ視線を落とすと、一匹の虎猫が彼女を見つめていた。虎猫がべろりと己の顔を舐める間にも、公園の奥の方から鳴き声がする。

「みゃー」

「みゃーあ」

ずいぶんとたくさん猫がいるようだ。声の主を探そうと再び視線を上げると、時子の視線の先にはあの人の瞳があった。期せずして目を合わせた二人は、会釈しようとして目を見開く。

「あっ」

お互いがお互いを認めると、見覚えのある顔に感嘆の声を上げた。

「笠松さん、ですよね？」

「は、はい。えっと、あー」

屈んでいたあの人は淀みなく彼女の名前を呼んだのに対し、時子は彼女の名前が思い出せない。ばつが悪そうに立ち尽くし、苦笑いしている。

女性はゆっくりと立ち上がると、時子に笑顔を見せた。時子は青白い街灯に照らされる彼女の顔を少し見上げて、仕事と同様の笑顔で相対した。

「桜田久乃です。笠松さんの隣、第三グループ所属です」

「ごめんなさい、桜田さん。お顔はよく拝見しているの……」

「お気になさらないでください」

街灯に照らされていると言え薄暗い園内で、キラリと光る久

乃の瞳。まるで猫のようだとし子が感じたのは、会話の間にもひっそりなしに聞こえてきた声のせいだろうか。

「みゃう」

「みゃー」

「みゅうみゅう」

久乃の足下には数匹の、時子が数えてみると六匹もの猫たちがいた。あるものはお行儀よく座り、あるものは久乃の靴の上でじゃれている。

猫たちの声に促されるよう、久乃は再び屈んだ。

「こちらは笠松時子さん、久乃と同じ会社で働いている人だよ」
パスガイドのようにちよんと掌で時子を示した久乃は、猫たちに時子を紹介している。

時子は予想だにできなかった行動に多少驚きながらも、目を細めて見守った。

（まるで猫のお姉さんね）

長身で細身の久乃はキリッと冷たささえ感じさせる容貌の持ち主だったが、不思議と猫たちの中では優しいお姉さんに見える。

時子に近寄ってきた虎猫がひよいと久乃に飛び乗る。虎猫は左肩に座ると、久乃に撫でなれながらじっと時子を見つめている。なんだか挨拶をされているように時子には感じられた。

それならばと時子も屈み込み、虎猫と向かい合い挨拶した。

「よろしくね、虎猫さん」

まさか言葉がわかったわけではなからうが、時子の挨拶で他の猫たちも寄ってきた。

「みんなも、よろしくね」

みゃあみゃああと反応しながらも、まだ久乃のそばを離れきれな

い様子は幼い妹のようだ。そんなことを考えながら猫たちを眺めていた。

足下の三毛猫が久乃に飛び乗る。太ももに上がり背を伝い上を目指す三毛猫を目で追えば、やがて時子の目には久乃の表情が映った。

困った風な表情に、何か失礼なことをしてしまったかんと時子が考え出す前に答えが返ってきた。

「あの、終電、大丈夫ですか」

「あっ」

そもそもオフィスを出た時刻が遅かったのだ。時子は左腕を上げて時計を見ると、二十四時をとうに回って終電の到着時刻が迫っている。

慌てて立ち上がる時子を、久乃と猫たちは見送った。

「お休みなさい」

「みゃー」

「みやああ」

時子はスカートの裾を直しながら視線を戻すと、みなが彼女を見つめている。

「お休みなさい。また明日」

時子は改めて小腰を屈め手を振ると、バネのように伸び上がって公園から走り去った。

いつも通りに出社し、まだ人がまばらなオフィスの自席に着く。時子は自宅からオフィスまでが近い方ではなかったが、朝早くに来るのが習慣だ。静かに仕事ができるのが定時前と定時後だからという理由なのが彼女の生活をよく表している。

いつもであればロッカーから持ってきたパソコンを起動し、何に気を取られることもなく作業を始める。しかし昨日の今日どころか、今日の今日である。隣の第三グループの島に目をやると、彼女はまだ来ていないらしい。

(こんな早くに来るわけないわね)

つい確認してしまったことを自嘲気味に小さく笑いながら、椅子に腰を下ろした。

十分もするとオフィスにもだいたい人が増えてくる。必然と時子に声をかける人も現れ始める。定時前に捕まるとろくなことがない。そろりと席を立とうとする彼女を、「笠松さん、少々お時間よろしいですか」という声が引き留めた。

時子が次に自席に着いたのは十時間後、定時もとうに過ぎて暗くなつた十九時。朝に比べれば多くの人がいるが、彼女の視線の先はまたもや空席だった。

会議の合間、外出の前に見た限り、久乃は出社しているようだった。ただ、どうにも間が悪く、時子が戻ってくるときには久乃が席を外してばかりだった。そして今や、机の上は朝と同様に綺麗さっぱり、何も置かれていない。考えるまでもなく退社のあとだ。「何を話そうってわけでもないけどさ」

一人、また一人と去って行くオフィスで時子はキーボードを叩き続ける。

気付いたら日付が変わってしまいましたと言うほど仕事熱心なわけではない。時計に目を落とすと、二十三時。数人が残るフロアに挨拶をして、時子はオフィスを出た。

まだひんやりとする夜風の中、ちょうど来たバスに乗り込み定期券をかざす。

(今日もいるのかしら)

僅か十分弱で駅前だ。携帯電話の画面を見ながら彼女のことを考えていれば、あつと言う間に到着する。

カツ、カツ、と歩道を歩む音が消え、代わって聞こえる土を踏む音は少し早い。

「こんばんは」

果たして久乃は、今日もそこにいた。

「こんばんは、笠松さん」

屈んで背を向けていた久乃は、くいつと首だけ後ろに向けて時子に挨拶を返した。

「みゃーあ」

「みゃあみゃあ」

彼女の周りの猫たちも挨拶しているようだ。

時子は一步、二歩と進んで、久乃の隣に屈み込んだ。

「こんばんは、猫さんたち」

「みゃー」

元気に挨拶を返す猫たちは、時子の言葉を理解しているのだろうか。

「あなたは昨日いなかったものね。久乃と一緒に仕事をしている笠松さんだよ」

「みゃお」

久乃と猫のやりとりを見ると、まるで会話のように感じられた。

(猫が人の言葉を理解できる?)

時子はふと、自分が考えていたことに違和感を覚えた。

(そんなはず、あるわけないじゃない)

夢想の世界に足を突っ込んでしまった自分がなんだか恥ずかしくて苦笑い。

そんな彼女の前には昨日もいた虎猫がとことこと寄ってきて座り、じつと彼女を見つめている。

言葉どころか思っていることすら伝わっているのかしら、なんて考えそうになった己にかぶりを振った。

「よかったら座りませんか」

近くのベンチを指差す久乃に誘われ、時子も立ち上がった。

隣同士に座る二人だが、全く様子が違う。時子も程なくして気付いた。

「私、猫たちに嫌われてるのかな?」

久乃の足下には、膝の上には、肩の上には猫がいるのに、時子の周りには一匹もない。虫除けならぬ猫除けが存在するなら、その宣伝にもってこいの絵だ。

「ふふっ、笠松さんって心配性なんですわね」

「え、いや、そんなつもりじゃないんですけど……」

「大丈夫です。みんな笠松さんのことが大好きです」
「でも、ほら……」

時子は久乃を見て、また時子自身を見て。そうしている間にも久乃の膝にはまた一匹、白黒斑の猫がひよいと飛び乗っている。

「私たちが触れたら服を汚しちゃうって思ってるんですよ」

「えっ?」

猫だらけの彼女はどこまで本気で言っているのだろう。

言葉の理解すら非現実的だと一蹴した時子には、久乃の言葉の真意がつかめない。彼女なりの冗談なのだろうか。それとも。

「笠松さんのスーツに足跡つけたら大変じゃないですか。私のは

全然大丈夫ですけど」

洗いざらしのシャツとロングスカートをひよいとつまんで見せてくれる彼女。初めて見たときと変わらぬお姉さんのような優しい表情は、大まじめに説明している顔に見える。

「猫って、そんなに、賢い、のですか？」

「賢い、ですか。笠松さんは猫のことをどう思っているんですか？」

「どう、って……」

猫をどう思うか。猫は人の言葉を理解できるのか。猫は人を慮ることができるのか。

考えるだけですら恥ずかしかつたことを改めて考えて、剩え口にする。頭痛がしそうな状況に時子は。

「猫は、猫ですよ……」

「だってさ、みんな」

苦しい答えを久乃は猫たちに渡す。

猫たちはやはり、わかっているのだろうか。無言で、まるでジト目で時子を見つめていた。

公園で偶然に会ってから二週間、時子は毎日公園に顔を出していた。雨の日ですら公園にいた久乃である、もちろん毎日いた。土日の出勤ついで行ってみても、やはり彼女は猫たちといった。

夜の公園では何とはなしに話している二人だが、職場ではこれまでとそう変わらぬ。

「お疲れさまです」

「お疲れさまです。久乃さんは上がり？」

「はい。お先に失礼します」

朝か夕方かの挨拶。言葉を交わす機会はその程度、一日一回あるかないかである。

「今日も二十三時頃になると思いますけど、行きますね」

「猫たちと一緒に待ってます。では」

挨拶に一言加わるようになったことだけが変化だ。

尤も職場での時子には多少の影響を与えていた。

（今日は二十二時までで絶対終わらせる）

終電にさえ間に合えばそれだよと思っていた彼女であるが、今や寄り道の時間を確保せねばならない。ましてや今日など、十分な時間を確保したいと思うほどである。

誓った刻限から数分遅れでパソコンをシャットダウン、机上の書類と一緒にロッカーへ放り込む。更衣室で着替えを終えると、颯爽とフロアのドアを開け放つ。

「お疲れ、ってどしたの？ ついにデートにでも行くの？」

「そんなところね。お先です」

すれ違った同僚の揶揄にも歩みを緩めることなく、時子は早足のままにオフィスを出た。

バスに乗れば携帯電話を取り出すのがお決まりだったが、今日は鞆に手を着けることもなく、大きな窓に映る己の姿を見つめた（デート、ね。そうよ、この勝負服で負けたら泣いちゃうんだから）

何度目かの停車でバスが駅前に着くと、彼女はステップを勢よく蹴って降りた。

（さあ、なんて言ってくれるのかしらね）

公園に入ると今日の久乃は長身を立てている。時子の気配に気付いて振り向くと「あら」とでも言わんばかりに目を見開いた。

「こんばんは」

一方の時子はしてやったりと自信たっぷり。そこがキャットウォークの先端であるかのように身体をピシッと止めて、視線を決めた。

「こんばんは、じゃないわっ！ 用があるのは猫さんたちよ！」

「しくしく、私は振られてしまいました」

「さあ、いらっしやい！」

到着の勢いを維持したままの時子が機敏に屈んで手を広げると

——トトトトト……

——トトトトト……

——トトトトト……

それぞれに歩みを早めて向かってくる猫たち。

ひよいと地面を蹴ると、事もなげに時子の肩や背中、頭の上に飛び乗った。

「ね？ みんな、時子さんのこと大好きなんです」

声に応えようと時子が重たい頭を上げる。

「っ!？」

目の前に久乃の顔。久乃の顔が近い。久乃の顔が目前にあった。

「な、な——」

「久乃も乗っかっちゃおうかにやー」

時子に比べだいたい大柄な久乃である。乗ったふりをすべく正面から抱きつけば、時子はすっぽり。

さらには久乃の行動に扇動されたのか、周りの猫たちがみな時子に飛び乗った。

「にやーにやー、時子さんの頭は居心地がいいにやー」

「にやーじやなーいっ」

振り払おうとすれば猫は増え、久乃の腕は時子を強く寄せた。

「にやー」と鳴く彼女の胸が時子の額に当たる。もふもふ、ふかふか。

(なんでこんなふかふかなのよ！)

着古しのTシャツにジーパン。勝負服の選択は完璧だったらしい。

+

口さがない連中はどこにでもいるもので、色恋の噂など何の役にも立たない会社の中ですら例外ではない。

「笠松さん、聞きましたよー。えらく若作りで男と歩いていたら」

「て」

朝から何度目だろうか。毎度ご丁寧に少しずつ違うが、時子にしてみればいい加減うんざりである。

「鈴木、それ、どこから聞いたのよ？」

「どこって言うわけでもなく、あちこちで。直近は山田から聞きましたけど、さすがにホテルに入るところだったってのは違うんじゃないかなーと」

「ほう、なぜそう思った？」

「野外派って噂が先行して二件あったので」

「お前殴るぞ」

「いやいやいや、俺じゃないっすよ」

噂の出所は間違いない、昨晩の帰り際にすれ違った者だろう。しかしそれが誰だったのか、時子はさっぱり覚えていなかった。

(どれだけ浮かれていたのかしら、私は)

心境を振り返り、時子は己の恥に悶えそうになる。その後のことを考えればもつと恥ずかしい。

熱を持った頬はきつと紅潮しているだろう。気付かれたら何を言われることかと思っていると、向かいでパソコンを準備しながらの彼は話を変えた。

「そーいや、隣のグループの桜田さんも今日の話題っすよ」

「桜田、桜田久乃さん？」

意外なところで名前を聞き、つい反応した。

「そうそう。誰かの男を寝取ったとかで泥棒猫呼ばわりっすね」

「ひ——桜田さんが？」

「ええ。まあ、笠松さんの話よりさらに怪しいと思いますけどねー」

「そうなの？」

「あの人がよく噂になるんですけど、寝取り寝取られなんてそんなじゃないと思うんですよ」

「意外とまともなこと言うのね」

「そりゃもちろん。これからお見せする提案書もよくできてますよー。準備できましたので始めます」

そのあとの打ち合わせに身が入るわけもない。時子は己の噂のことも忘れ、久乃について考えていた。

(泥棒猫？ 猫は好きだけど……。每晚公園にいる久乃さんが、なぜそんな噂に……。)

考えても考えても、時子が結論に至ることはなかった。

一つに久乃の噂に関する情報が少なすぎる。時子が持っているのは今し方聞いた話だけだ。一つに時子は久乃のことをよく知ら

ない。よく知らないとい付いた。

(第三グループの派遣社員。每晚公園で猫と一緒にいる。他、知らないものね……)

つまり考えるだけ無駄。時子は気持ちを切り替えて、とまではいかないまでも、久乃と顔を合わせるまでは考えることえを中断して、働き詰めの彼女に戻った。

久乃とは言葉を交わすことがないまま社外へと出て、気付けば定時を回っている。週末でこれから飲みに行くサラリーマンやら、これから食事のカップルやらで溢れているが、時子はまだまだ仕事 중이다。

「二十一時から会議ですか。これ、土日もあるんですよ……」

出先で取った不幸の電話は彼女への帰社命令だった。尤も命令がなくとも、彼女は最寄り駅までは戻っただろう。

人の流れに逆行して戻りの電車に乗るべく駅へと向かう。彼女の視界の中だけでも、毎秒数十人が流れていく混雑ぶりだ。それにもかかわらず見つけられるのは何が故なのだろう。

視界の右端いっぱい、歩いているのは。

(……久乃さん、と?)

時子の脳裏を今朝の噂が掠めた。

久乃であったことは間違いないように思える。男と歩いていたことも間違いないように思える。しかしこの人混みの中、あの一瞬でそこまでを識別できるものだろうか。

噂が枯れ尾花を幽霊に見せたのではないか。半分はそう考えるも、半分はやはり本物の幽霊であったのではないかという思いが抜けない。

(考えても仕方ないわ。あと数時間もすればわかることよ)
今この瞬間も大量に流れ来る人とは逆行しながら、時子は整った足取りで自動改札を抜けた。

会議室から出てくる面々は一樣に引きつった笑顔を引っ提げていた。

「笠松さんとは笠松さんがやるの?」

「ええ、今から土日に出せるの、私ぐらいしかいませんので……」

「だよなあ。俺のところも俺だよなあ」

時子の隣に座っていた彼も例外ではなく、笑うしかないよねと言わんばかりの表情だ。

「しかも木村さんの方、結構多いですよ。私は午後から出るぐらいで間に合いそうですが」

「そうなんだよなあ。俺は朝からだな。今日はもう帰るわ」

「お疲れさまです」

時子は言葉通りに気持ちを含めて頭を下げると、自席に戻った隣の島、第三グループの机にはもう何も残っていない。だからなんとすることも無い、この時間には当然のこと。

左腕の時計は二十二時半を指している。

(まだ時間、あるわね)

いったい何が「まだ」なのかは時子自身もよくわからなかった。(まだ終電までは時間がある? そうね、当然よ)

(まだ仕事ができる? それもそうね)

この週末に扱う資料を画面に開き、カーソルを泳がせながら考える。

(まだ行くのは早い? まだ? なぜ?)

昨晩は今頃もう公園にいた。それが今日はまだ早いとはどういうことだろう。

(……まったく、頭痛の種を増やしてどうするのよ)

大きくかぶりを振ってキーボードを叩くと、真つ新たな文書を開き、さらにキーボードの音を響かせる。

次に画面から視線を外したのは、フロアの奥から呼ばれたときだった。

「笠松さん、最後よろしくねー」

その声にいハツとしてフロアを見渡すと、確かにもう誰もいない。

「はーい、お疲れさまですー」

大きめの声で挨拶しながら左腕をちらりと見る。

「あーあー、間に合わないじゃない」

時子はやや慌てることもなく机上を片付けると、フロアの電気を消し、ドアをロックしてオフィスを出た。

いつもは立ち止まるバス停を横目に、駅までの道を真っ直ぐに歩く。

深夜にもかかわらず明るい歩道。所々で散り始めた桜の花びらが舞っている。

(真夜中のお花見もいいかも知れないわね)

目の前に現れたコンビニに入り、手にしたのは缶ビール二本と猫缶三つ。ご丁寧に割り箸も袋に入れる店員に苦笑しながら、再び駅までの道に行く。

何個目かのバス停を通り過ぎると、すっかり見慣れた公園入り口だ。

「久乃さーん、お花見しよーっ！」
目を閉じ精一杯に叫んだ大声は、誰かに届いたのだろうか。
時子の視界には今日も、肩に猫を乗せた彼女の姿が見えた。

締切近いとだいたい痛い

川鶺鷄肋

申し訳ありません。前後編にせざるを得ませんでした。タイトルは一瞬で降りてきましたね。もうこれしかないって感じです。パラ～パラ～パラダイス♪（パラパラパラダイスにあらず）

春屋アロツ

今回は mCMX 8 で登場したお気楽二人組 + 1 が体調を崩すお話です。ただし一人は崩す体調がありません。皆さんは季節の変わり目で体調を崩したり、酒で身を持ち崩したりしないようお気をつけください。

<http://third.system.cx/>

Fukapon

本当に途中でリリースした前回分 + 続きです。1年半も書いていないと「書けるの？」って怖くて、でも怖いと言ってても書けないので、前よりひどくても書くしかないなって思って書いたらやっぱりひどくて。みたいな状態ですが、今回書いたから次があるよねって思うとよかったかなって。今年はがんばろー。

<http://www.fukapon.com/>

企画・編集

王子から弘前に移りました。来年も弘前分室で作ります。再来年はまた移る予定なのですが、場所は未定。どこがいいですかね？ やっぱり北へ。かな？

<http://www.projectkaigo.org/>

mnfikmyhk
CREATURE MIXING 14

頭痛

2016年5月5日 初版発行

発行所 まにふいくみやはか
<http://www.projectkaigo.org/>

印刷／製本 project KAIGO

Copyright © 2016 川鶏鶏肋, 春屋アロツ, Fukapon, まにふいくみやはか
この本は Creative Commons Attribution 4.0 International License に従い頒布されます。
詳細は <http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/> をご覧ください。

mCMX 編集部ではあなたの作品をお待ちしております。
ちょっとがんばって営業しないとと思ってます。

読めない子

がテーマの作品を募集中。ジャンルは何でも。
締切は発行当日00時（+2時間ぐらい）。
未完成でも載せちゃえばいいんですよ。

次の発行は1年後、また5月の予定です。

<http://www.projectkaigo.org/>

今年、来年は年1回で。

1人体制なので実習がヤバそうな時期は回避するのデス。